

日本自動車史の資料的研究 第12報

有栖川宮威仁親王と自動車の御奨励, 明治38年(1905)～

大須賀 和 美

1 前 書 き

日露戦争の直後我が国へ欧州の高級自動車を最初に輸入され、自家用として自からハンドルを取り、また各方面に自動車を御奨励になった先駆者として、有栖川宮威仁親王（ariusがはのみや たけひと しんのう）の話題は日本の自動車史上に広く認められた事実であるが、その実体は断片的かつ、不確実に伝えられているのみで、一連の史実としてまとめられたものを見受けない。

そこで前回までの研究と同じく、全国各地の当時の新聞を調べた中から、関連記事を整理して年月順の資料集とし、事の推移と史実を浮かび上がらせることにより、次のようなテーマに分けて確認することとした。

- (1) 親王の略歴
- (2) 国産自動車第1号の製作
- (3) 自動車遠乗りの記録
- (4) 「日本自動車倶楽部」の結成と遠乗り会
- (5) 皇室用自動車の導入

2 概 要

参考とした代表的な記事は、裏付け資料として後節に転載してあるが、大体の流れを知るために、見出しと新聞名を日付順にまとめてみると、次のとおりである。ただし、皇室用自動車については別記することとした。

- 明治39年2月15日（静岡民友新聞）園芸と自動車、有栖川宮殿下の御嗜好
40年8月9日（下野新聞）有栖川宮御登見
40年8月13日（ ” ）有栖川宮殿下登壇
40年10月23日（時事新報）有栖川宮御乗用自動車、宮殿下の御嗜好一切本邦の材料
40年11月15日（大阪毎日新聞）有栖川宮の御危禍、一群の馬士殿下を包囲す
41年4月8日（神戸新聞）有栖川宮殿下と自動車、自動車と逸話の教々
41年7月26日（報知新聞）有栖川宮殿下御危難を免れさせらる、御召の自動車焼失す
 ” （ ” ）有栖川宮殿下自動車隊を組織せらる、来月一日立川の御鮎獅
41年8月2日（ ” ）自動車隊の遠乗、有栖川宮殿下把手を執らせ御先導をなす

- 明治41年8月2日 (報知新聞) 自動車万歳, 長岡少将演説
 41年8月2日 (") 自動車遠乗の壮挙, 有栖川宮の御出遊, 随行紳士等の光栄
 41年8月5日 (大阪朝日新聞) 有栖川宮御来遊 (日光電話)
 41年8月19日 (") 有栖川宮殿下 (若松電話)
 41年9月9日 (神戸新聞) 有栖川宮御別邸 (東京電話)
 41年9月13日 (時事新報) 自動車旅行, 東京より猪苗代の有栖川宮御別邸迄
 41年9月14日 (") 自動車旅行 (続)
 41年9月17日 (") "
 41年9月18日 (") "
 41年9月19日 (") "
 41年9月20日 (") "
 41年9月23日 (") "
 41年11月9日 (やまと新聞) 自動車隊の遠乗会
 42年5月11日 (報知新聞) 有栖川宮殿下の自動車溝に落つ
 42年5月31日 (時事新報) 本邦無比の自動車, 有栖川宮の御乗用
 42年7月13日 (信濃毎日新聞) 自動車隊の遠乗り, 有栖川威仁親王殿下
 42年9月8日 (河北新報) 有栖川宮御着, 越河松原堤防に於て御昼餐長町鉄橋御徒渉あらせらる
 42年9月10日 (") 有栖川宮御発
 43年5月30日 (報知新聞) 御快方に向はせられたる有栖川宮
 43年7月1日 (時事新報) 有栖川宮御近状, 両殿下別々に御静養, 前田家御案内御断り
 43年12月21日 (やまと新聞) 自動車協会設立
 " (") 自動車倶楽部の発会と活動の目的 (英大使の希望)
 44年9月8日 (国民新聞) 有栖川宮御近況, 自動車の御研究
 44年10月8日 (時事新報) 一都一日十万車 (有馬有栖川宮家従談)
 " (") 東京の自動車界
 44年10月29日 (報知新聞) 自動車卅五台の紅葉狩
 44年10月30日 (") 六ヶ国の人種を乗せた卅二台の自動車隊
 44年12月13日 (時事新報) 自動車界, 現下東京の車両数, 自動車倶楽部の発展
 45年5月13日 (") 自動車の遠乗り, 村井別荘に園遊会, 横浜に飛行機を見る
 45年5月25日 (国民新聞) 自動車専用渡船, 栗橋の利根川渡津
 大正元年8月8日 (名古屋新聞) 有栖川宮御近況
 2年2月14日 (時事新報) 自動車倶楽部総会, 会員自動車に就て意見の交換をなす
 2年4月10日 (") 改正自動車税率, 今ま迄は一台六十円, 四月以来馬力に依る
 2年4月16日 (") 自動車の税率は馬力が標準, それに就て警視庁と府当局の意見の相違
 2年6月13日 (") 自動車課税問題と倶楽部と, 届出の馬力は不正確, 爾後は倶楽部で測定
 2年7月7日 (") 有栖川宮殿下薨去, 四日来御容体急変, 六日午前十時薨去さる
 " (") 御平常自動車に特別の趣味
 " (") 葉山と故殿下

(1) 有栖川宮威仁親王の略歴 (大正2年7月7日付時事新報記事から主に抜すい)

文久2年戊正月13日 有栖川一品幟仁 (たかひと) 親王殿下第四子として御誕生 (1862)

明治8年4月 海軍兵学寮へ御入寮 (1875)

- 明治11年 5月18日 明治天皇陛下の御猶子とならせ給ひ、兄熾仁（たるひと）親王殿下の御継嗣とならせ給ひ親王に列せられ、三品に叙せられる（1878）
- 12年 7月26日 英国海軍旗艦乗組（1879）
- 13年12月 1日 海軍少尉に叙せられ、英国留学の為英艦御退艦（1880）
- 13年12月11日 前田侯爵家慰子（やすこ）姫と御結婚（1880）
- 16年 6月 英国留学から御帰朝（1883）
- 22年 2月16日 海軍事視察として欧州へ御差遣（1889）
- 23年 4月10日 欧州から御帰朝（1890）
- 28年 5月18日 兄熾仁親王薨去のため、有栖川家当主となられる（1895）
- 30年 4月22日 英皇即位60年祝典のため渡英（1897）
- 37年 6月28日 海軍大将に陞進あらせられる（1904）
- 38年 4月 1日 独逸皇太子結婚式に御参列のため御渡欧（1905）
- 38年 8月26日 欧州から御帰朝（1905）
- 41年 4月 7日 長男裁仁（たねひと）親王、海軍兵学校にて病気のため薨去（1908）
- 41年11月 8日 二女実枝子姫、徳川慶久公爵と御結婚（1908）
- 42年 9月下旬 兵庫県舞子の御別邸に転地病氣療養（1909）
- 大正 2年 7月 6日 舞子の御別邸にて肺結核のため薨去、御歳51（1913）

この履歴で分るように殿下は前後4回渡欧されており、各国上流社会とのお交際で身を持って欧米文化を体験され、その後の洋風ご趣味として話題にのぼる、自動車・カメラ・狩猟・洋蘭・玉突等の切っ掛けとなったと思はれる。

特に1897年の渡英は、1895年に悪名高い「Red Flag Law, 赤旗法」が徹廃され、モータリゼーションの波がイギリス全土を覆った直後で、街中を走り回る自動車は機械好きの殿下の興味を大変引き、次の渡英（1905）のときお買い求めを予定されたと思はれる。

殿下の輸入されたのは次の3台で、自動車自体がめずらしい日本に初めて渡来した世界の高級車であった。

ダラック（Darracq）35H P, フランス製……………明治38年 8月輸入（1905）

メルセデス（Mercedes）45H P, ドイツ製……………〃 42年 4月輸入（1909）

デムラー（Daimler）馬力不明, イギリス製……………〃 43年 4月輸入（1910）

明治41年まではダラックを、42年中はメルセデスを御愛用になり、同年秋兵庫県の舞子に転地療養後は東京の本邸に保管されていたが、その後病気が一時快方に向はれたとき、後着のデムラーとも舞子に転送されていた。

明治帝のご大葬のとき、自分が参列できないためせめてもと、これ等の車を宮内省に提供され、外賓の接待用に使用された。

(2) 国産自動車第1号の製作

前述ダラック号を最初に輸入され自から運転された殿下は、自動車奨励の意向から、高い輸入税（五割）や輸送費を払って輸入することなく、日本の道路事情に合った小型自動車を国内で生産することを考えられ、明治39年春、東京自動車製作所の吉田真太郎にその試作を依頼された。1年半後の40年10月に第1号車が完成して殿下に納入され、更に41年夏にかけて同型車7台が殿下の側近に納入された。

この車が「国産吉田式」と称せられる国産自動車の第1号で、その仕様は、水冷・水平対向2気筒ガソリン・エンジン・12HP・4人乗りの小型自動車、タイヤ・電装品以外は純国産であった。

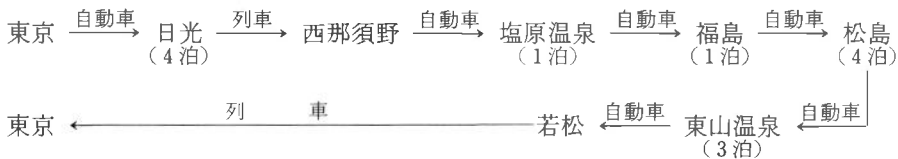
吉田真太郎は、横浜に今も名の残る吉田橋を寄贈したことで有名な土建業者吉田虎之助の子息で、貴族院議員三浦安（東京府知事・宮中顧問官を歴任）の女婿に当り、明治30年から東京の木挽町に輸入自転車商双輪商会を経営し、日露戦争後自動車専業に転向していった上流社会の方である。殿下がダラック号を輸入された当時、東京で唯一の自動車工場として車の整備などでお近づきになったと思はれる。

(3) 自動車遠乗りの記録

自動車遠乗りの記録は、当時の道路事情や車の性能を伝えるものとして貴重なものである。

有栖川宮殿下は絶えず東京近郊のお出ましに自動車を利用されていたが、遠乗りとして特に確認されるものは、以下のとおりである。

① 明治40年8月8日～21日



この自動車旅行は、ダラック号1台に若宮を伴はれた避暑旅行で、姫殿下も途中列車で合流されていた。8月12日には同じく避暑で那須の御用邸に滞在中の東宮同妃両殿下と対顔され、若宮姫両殿下は8月18日松島から直接列車で帰京された。殿下は猪苗代湖畔翁島に新築中の御別邸の工事視察のため東山温泉にご滞在、8月21日若松から列車で帰京された。

② 明治41年7月25日、多摩川鮎狩、国産吉田式1台。

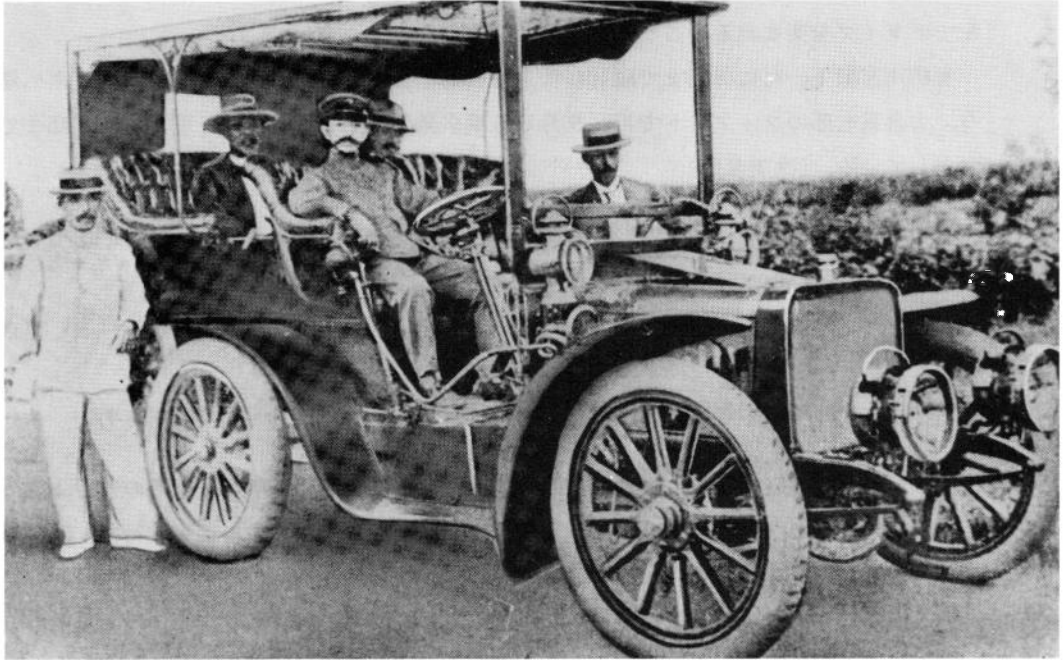
従者2人のみで小型自動車を使った簡単な運転は、1週間後に自動車隊を先導されて同じ鮎狩をされたことから、道路状態の次前調査ではなかったか。

③ 明治41年8月1日、自動車隊11台による立川への鮎狩。

自動車ご奨励の目的で、側近の自動車所有者を誘い11台50人の大集団で、はじめて7里の行程を往復され、参加車は次のとおりであった。

(写真-1) 「有栖川宮殿下とダラック号」

注：明治41年8月1日の遠乗り会，甲州街道上にて。ハンドルは殿下，車の右外側白服は吉田真太郎



有栖川宮殿下

渋沢男爵

中上川次郎吉

森村市左衛門

日比谷平左衛門

小栗常太郎

古川虎之助

大倉喜七郎

東京自動車製作所

三越呉服店

報知新聞社

ダラック号

ハンバー号

国産吉田式

第4号

同上

第7号

同上

第8号

フォード号

マセソン号

フィヤット号

ハンバー号（応急修理用）

クレメント号（貨物運搬用）

キャデラック号（番外）

(写真-2) 「ダラック号のエンブレム」

自動車雑誌「DAS AUTO・EIN HALBES JAHRHUNDERT GESCHICHTE」から

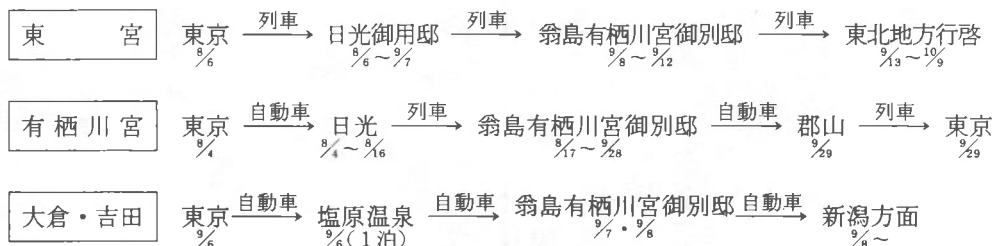


④ 明治41年8月4日，日光への避暑旅行。ダラック号と随行の国産吉田式の2台のみ。

恒例の避暑旅行を姫宮ご同伴で自からハンドルをとられ，8月4日～16日まで日光にご滞在，8月17日新築完成の猪苗代湖畔翁島の御別邸に列車で移られ，9月29日帰京までの

長期ご滞在となった。その間同じく日光にご避暑中の東宮殿下が、9月8日この新築別邸にお成りになり、9月13日からの東北地方視察行啓前の一時滞在され、有栖川宮殿下の運転でドライブを楽まれる一こまもあった。

有栖川宮殿下一行に日光まで随行した東京自動車製作所の吉田真太郎は、一端東京へ帰り、大倉喜七郎のフィアットで再度9月6日東京発、1泊2日の行程で翁島の御別邸まで参上している。(次項参照)



- ⑤ 明治41年9月6日・7日、大倉喜七郎と従者、吉田真太郎、時事新報記者の一行4人、車は大倉のフィアット号。東京から猪苗代湖畔翁島まで1泊2日の自動車旅行は、時事新報に同乗記事として連載されており、当時の道路事情を知るよい資料となった。(前項参照)
- ⑥ 明治41年11月8日、有栖川宮実技子姫の徳川慶久公爵との御結婚を祝し、大倉喜七郎はじめ側近の自動車愛好家10余台が集まり、大宮方面へ第2回の遠乗り会を行った。
- ⑦ 明治42年5月下旬、新着のメルセデス号の試運転で大磯の伊藤総監を訪ね、箱根の塔ノ沢まで同乗、即日帰京されて全行程130マイル余(210km)。
- ⑧ 明治42年夏、葉山一色の御別邸松雲閣へ自動車で、2泊3日の避暑旅行。(詳細不明)
- ⑨ 明治42年9月9日・10日、猪苗代湖畔翁島の御別邸に避暑中の殿下は、帝国水難救済会総裁として宮城県塩釜町での同支部発会式に出席のため、新着のメルセデス号を運転され仙台まで45里の田舎道を往復された(往復350km)。

翁島へ帰邸されて間もなく肋膜炎を発病、9月下旬兵庫舞子の御別邸に転地、4年間の療養の末大正2年7月薨去されるまで、二度と自動車を運転されることはなかった。

(4) 「日本自動車倶楽部」の結成と遠乗り会など

明治41年8月の有栖川宮による立川への遠乗り会のと看、既に国産吉田式も8台完成し、次第に自動車所有者が増えてきたので、英国自動車クラブ(RAC)のように殿下を総裁に仰いだ懇親会を作ったらとの呼びかけが参加者の中からはなされたが、翌42年9月殿下が舞子へ転地療養されたことから中断されてしまった。

しかし、自動車ご奨励の気運はそのまま引き継がれ、有産階級は急速に自用馬車を自動車に乗り換えるようになってきたが、手造りの国産車で満足することなく、欧米高級自動車の輸入競走となり、新しく外国人輸入業者を中心とする自動車グループができてきた。

明治43年12月、駐日外交官も交えた内外自動車愛好家によって「日本自動車倶楽部、NAC」の発会式が帝国ホテルで行はれ、総裁に大隈伯爵、世話人に大倉喜七郎らが当ることとなり、日本では未開の交通機関である自動車の利用上、社交とともに共通の問題解決に当ることとなった。

翌44年度には自動車の輸入税が5割から3割5分に引き下げられ、45年には日光街道の利根川に自動車専用渡船を設け、大正2年度には自動車税が馬力別に改正され、馬力証明書を倶楽部が発行するとか、鎌倉街道に初めて自動車専用道路標識を設置するなど、いろいろ政治力による業績が話題に残り、また、月刊機関雑誌「自動車」が大正元年12月号から発行されていった。

また、倶楽部主催の自動車遠乗り会として、次の2つが記録されている。

- ① 明治44年10月29日（日曜日）、高尾山の紅葉狩り。
日比谷公園に集合、参加32台、内外人家族とも150人。
- ② 明治45年5月12日（日曜日）、たばこ王村井吉兵衛の大磯別荘での園遊会。
日比谷公園に集合、参加東京20、横浜から26の計46台、内外人家族とも150人。

(5) 皇室用自動車の導入

明治43年12月、外賓接待など皇室用自動車の購入が公式に決定されると、当然皇族中唯一の自動車通である有栖川宮殿下に宮内省から、いろいろ相談があったことと思はれる。

舞子に病気療養中の殿下は、自動車に詳しい家従の有馬純篤を自動車研究の名目で、44年1月～8月の間欧州に派遣され、各国王室の自動車使用状況の調査を命ぜられた。

宮内省は有栖川宮殿下からの御意見を参考に、11台の購入車種を44年11月に具体的に決定、取り扱い業者に大倉組を指命、12月には宮家の有馬純篤と大倉組出身の佐藤丈夫を宮内省技手（運転手）に任命、合はせて佐藤に欧州出張を命じた。

大倉組の大倉喜七郎は、44年12月末佐藤を伴って渡欧、購入自動車の完成まで駐在して、大正元年10月帰国、佐藤は英国王立自動車クラブで自動車の勉強に務めた。11台の自動車は大正2年1月横浜港に輸入され、その車種は次のとおりであった。

デムラー 2台……陛下と貴賓用

フィアット 2台とメルセデス 2台……臣下用

その他貨物車と練習車……5台

大正2年4月14日、大正天皇が青山御苑にて、初めてこの自動車に試乗され、更に東宮殿下（今上天皇）には御所から遠い学習院への通学に御使用になったという。

有栖川宮殿下の自動車に深く関係のあった大倉喜七郎とは、当時の政府御用達商、合名会社大倉組を経営する大倉喜八郎（大正4年、男爵）の長男で明治15年6月生、明治33年（1900）、パリの万国博覧会見学の父に同行して渡欧、そのまま英国に7年間留学して明治40年に帰国した。

大倉組は当時ロンドン支店を開設していたことから、喜七郎の留学の助けともなり、恵まれた財力で欧州のモータリゼーションを十分に体験し、帰国後数少ない自動車通として社交界で活躍、

宮殿下や皇室の自動車輸入を大倉組を代表して取り扱った青年実業家である。

3 資料記事集その1

新聞記事の転記については、次の要領で行った。

- ① 縦書きの原文を横書きに、ルビは省略した。
- ② 旧漢字は常用漢字に、古字はそのまま。
- ③ 仮名遣いはそのまま、変体仮名のみ現代仮名に直した。
- ④ 判読できない文字は○印で伏字とした。
- ⑤ 明らかな誤字は直した。
- ⑥ 「自動車」の用法は原文のまま。

明治39年2月15日（民友）

●園芸と自動車、有栖川宮殿下の御嗜好

〈有栖川海軍大将宮殿下には園芸を好まされ前年中より各種の蘭百数十鉢を御手づから培養あそばされ御居間に飾付けて御賞翫あり嘗て三年町の御邸御新築の砌にも築山、泉水、樹木の配置、配り石の据方まで親しく御指図ありて其の御精しき斯道の者も及ばずと言ふ又犬の飼養法にも御精しく渡らせられ猟犬、番犬等を御飼養ありて係員等に種々飼養法を仰せ聞けらるるとかや又予て御嗜好の御事として英国より新式の自動車を御取寄せ相成り御散歩の折柄には親しく把手を執り給ひ疾走するをこよなく御楽あり昨今にては益々御熟練ならせ給ひ妃殿下に自動車の疾走する有様杯御物語りありて興に入らせ給ふやに承はる〉

明治40年8月9日（下野）

●有栖川宮御登見

〈有栖川宮威仁親王殿下には若宮殿下御同伴自動車に召させられて昨日午前五時東京御出発正午当駅御通過午後四時五十分日光に御着相成り別項汽車にて御登見相成りたる姫宮と共に神山旅館に御登宿あらせられたり右に付外山日光署長神山助役等は日光町外れに殿下の御着を奉迎したり〉

明治40年8月13日（下野）

●有栖川宮御登壇

〈有栖川宮威仁親王殿下には前号の紙上に記し奉り如く昨十二日午前七時日光御旅館御出発自動車に召させられ同午前八時五十五分宇都宮停車場に御着茲に上野発七時三十五分の列車に召されし若宮殿下の御着車を待合はされ十時十三分御着ありしかば大宮殿下には直ちに同列車に御乗車若宮殿下を伴はせられ同二十二分御発車西那須野駅十一時二十八分御着同所より再び自動車に御召の上塩原へ向はせられたり右に付中山知事深町内務部長安井裁判所長、向井検事正、宍戸司令官外数名の官民は当駅に奉迎し中津川保安課長は塩原まで御警衛申上げたり殿下には当夜塩原米屋方に御一泊東宮同妃殿下に御対顔の上今十三日塩原御出発再び自動車にて福島へ赴かせらる

姫宮殿下を福島駅に御迎へさせられ同所松葉館に御一泊明十四日更に松島へ向つて御出発の御予定なりと〉(筆者注、若宮は11日に日光から一端帰京され、再度松島で合流されている。)

明治40年10月23日(時事)

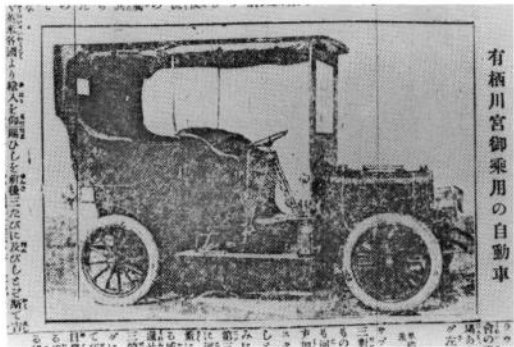
●有栖川宮御乗用自動車、宮殿下の御嗜好一切本邦の材料

く有栖川親王殿下には近頃英米各国に於て文明的交通機関として専ら流行を極めつつある自動車をば殊の外愛でさせ給ひ先年英国ダラック会社製造の三十二馬力瓦斯式自動車を遙々同国より取寄せられて市内扱は郊外の御運動に用ひさせられ嘗ては日光会津地方に遠乗を試み給ひし事もあり其都度殿下には車の前部即ち運転台に乗御あり随従の家従等には却て客室とも言ふべき後部に乘らしめて親しく把手を手にし給ひ運転の労を執らせらるこそ畏けれ斯る程に進行の御途上左右又は道路曲折の個所に於ける転廻の際など誠に驚かるばかり巧妙の技倆を有し給ひ殊に車両全部の構造に御精通あらせられて運転途上に於ける機械の故障又は調子を損じた場合など手づから即座の仮修繕を加へ給ひて其儘御進行を継続するを常とし総て自動車には特別の御趣味を有せらるるから

(写真-3) 「有栖川宮御乗用の自動車」

(国産吉田式第1号)

明治40年10月23日付時事新報から



に何卒して本邦にも此軽便なる交通機関を流行せしめたしとの御思召深く機に触れては家従等に其御物語りあらせらるれど如何にせん本邦にては同車の製作方猶ほ極めて幼稚にして完全なる製造所なく悉く英米各国より輸入を仰ぐ有様にて原価は左して高しと言ふに非ざるも荷造費又は運賃を始め原価に対する五割の輸入税等を課せられて本邦着後の価格非常のものとなり自然多数の需用者を出す能はざるをば常に遺憾に思召され昨年四月中予て御乗車の修繕方を命ぜられて屢々伺候せしことある京橋区木挽町四丁目東京自動車製作所主吉田真太郎を召し給ひ前記の御思召を申聞せられたる上にて新に自動車一両を調製せよと命ぜられしかば吉田氏は此上もなき名誉の事とし謹んで御受け申上げたるに殿下は御満足斜めならず尚ほ仰せ下さるるやうは本邦の道路は外国と異ひ道幅狭く且つ郊外の諸所には坂路多ければ是等道路の通過に便なる小形に製作するこそ必要なれ又所用の諸材料は成るべく本邦品を用ふべしなど世にも有りがたき御沙汰をさへ下し賜はりけるにぞ氏は先ず設計案を調製して翌年八月御覧に供し参らせたる後謹みて製作方に着手し拮据事に従ひたりしも何分其道に熟達せる職工少なく且つ車台の重量は成るべく軽くと御注文なりしかば兎角重量の付易き鋳物などは数十回の工夫と労苦とを重ねて薄ものに製しなどし本年九月初旬漸く完成を告ぐるに至れり其間殿下には製作の模様を氣遣ひて毎月の如く池田家従を差遣はされ長くも躬自から玉歩を塵深き製作所に枉げ給ひて其処は斯くせよなど御指図を賜ひしを前後三たびに及びしとぞ斯て吉田氏は九月初旬新製自動車を奉りて試運転を願ひ奉りしに

(写真-4) 「輸入税率表」

明治43年2月7日付時事新報から

注：NO. 563, 自動車5割に注目。

殿下には御機嫌麗はしくも^{ハンドル}把手を執って御邸内に運転を試み給ひ好う出来たとの御褒詞あり疾く
 裝飾を施したる上にて納めよとの御諒なりしが同氏は尚ほ十分なる修飾を施し此程全く竣成した
 りと言ふ同社の価格は五千円にて輸入品に比し約五割方廉きのみか輸入品に比して便利なる点は
 修繕上容易に其局部を取換へ得る事にて所要材料中の輸入品は護護車輪及び電気用附属品のみ他
 は皆本邦製品なりと言ふ尚ほ同車構造の説明は左の如し

- 原 動 機 冷水式二気筒横臥対向し気筒の直径四吋半衝程四吋半
- 発 火 作 用 電気「ジャンプ、スパーク」式にして蓄電池を用ゆ
- 放 熱 作 用 前頭部に位する水槽、多数の鋼管を備へ「ポンプ」に依り水を循環せしむ
- 速力変化機 「プラネトリー」式にし前進二種後進一種あり連鎖に依り伝導す
- フ レ ー ム 溝形鋼を用ひ車の総長十一尺総幅四尺五寸高さ七尺
- 車 輪 木製砲車式太さ一尺五寸突径五百六十仙米突の英国製「ダンロップタイヤ」を用ゆ
- 制 御 機 把手の下に瓦斯、電気の二者を司る小把手あり速力を増減す
- 制 動 機 足踏式に依る後車軸「デフエレンシャル、ギヤー」用の者と側方把手に依る後車内側の者との四個あり
- 油 槽 前部に十五瓦倫油槽を備へ各廻転部には自動装置の油槽を「クランクケース」の

上部に据置く

乗車台 四人乗りにして前方に運転者一名及び後方に二名を乗ず前方に硝子窓あり風雨除に供す又側面には「ダンプ」布を以て雨を凌ぐに便にす

明治40年11月15日（大毎）

●有栖川宮の御危禍、一群の馬士殿下を包囲す

〈有栖川宮殿下には十四日横浜に御帰着あらせられ玉ひし東宮殿下御迎へのため此程御新調遊ばされし自動車に召されて同日午前八時東京より横浜に向はせられ御車既に同市（横浜）神奈川町字中の町に差し掛からせられし際折柄切石を満載したる荷馬車を御せる山本市松といふが来かかりしに後より殿下の自動車が風を切て勢鋭く疾走し来る物音を聞や市松の馬は驚て狂ひ出し往來を横に斜断せんとし端なくも殿下の自動車と荷馬車と衝突し馬車は左の棍棒を折りて馬にも傷を負はせ自動車も又破損の箇所を生じ遂に運転の自由を欠き途上に停車するに至りたるが斯くと見て附近に居合せたる多くの馬士は四方より集り来り口々に不穩の言葉を弄して殿下の御身邊を押取り囲む容易ならぬ有様にお附の人々の驚愕一方ならず家令を始め一同制し止めんとする所へ巡査も駆着けたるがこれも有栖川殿下とは知らず折節馬士に取囲ませられ玉へる殿下に向て敵しき口調の尋問を始め殿下の御身分を横柄に尋ね問ふに殿下には是非もなく御名乗り遊ばされしかばこれとは巡査はその疎忽に平身低頭暫しはお詫の言葉も出ざりしが斯くてはあらじと直ちに此旨神奈川警察署へ急報し同署長又顔色変へて現場に駆け着け今更の如く恐縮して無礼の段々を御謝罪申し上げしに殿下には事もなく打笑ませ給ひてコハ雙方の失策なれば深く意に止る事もあるまじと御言葉を残させられ左右田銀行横浜支店前まで御歩行の上同所より再び応急の修繕成れる自動車に召しつ漸く進行を続けさせ玉ふ事となりたり之より先き岡田有栖川宮家令は此不時の出来事に驚き直に電話を以て神奈川県庁へ急報し馬車の廻送方を依頼し県庁よりは直に馬車を廻送せしも其時は既に自動車の修繕成りし時とて其儘勇しく御進行事なく皇太子殿下の御送迎を遊ばされたり（十四日東京電話）〉

明治41年4月8日（神戸）

●有栖川宮殿下と自動車、自動車と逸話の数々

〈有栖川大宮殿下には自動車を御好愛遊ばさる事一方ならず大の自動車通に渡らせらると共に又大の自動車操縦の御名人にてあらせらる舞子御別邸に御滞留の其時々には須磨、明石の浦々白砂青松の間を御自ら把手を取らせられつつ之を驅り給ふを此上なき御興樂と思され雨の日ならざる限り此浦伝ひの一路に必ず自動車上の殿下を拝しまつるべし、大宮御所有の自動車は大小二台ありて先月二十日頃江田島なる若宮殿下御病気に渡らせられし時御見舞の為め妃宮殿下姫宮と御共々に馬侍従、池田家令、女中五人を従へさせられ広島に成らせられたるが若宮一時御快方に向はせられたるを以て舞子御別邸に帰らせられ暫時御滞留の御予定にて東京より小型自動車を御取り寄せ遊ばされ兵庫駅に着したれば大宮には駅に向はせられ御自ら御操縦の上御帰邸遊ばされたり自動車御出遊の区域は遠きは京都に及ぶる事あり加古川須磨などは毎日御中餐の後ち

大抵二時頃御出遊あらせらるるを例とし時には有馬侍従を伴はせらるる事あれども池田家令を従へさせらるるが常なりき、されば村民の中には大宮が毎日自動車に召されて御出遊あらせらるるとのみは聞き及べど未だ親しく尊容を拝せざるものあり、大宮は如何なる場合にも他人に運転を托せらるる事なく必ず御自ら前方運転台にて把手を把らせられ池田家令を客分として後方に乗らしめらるる例なれば村民は池田家令を大宮、大宮を家令家従と取違へ、池田家令に向つて脱帽しとやかに敬礼する事往々あれば家令は余りに畏れ多く背に汗する事さへありきとぞ、又自動車の掃除は必ず御手から為させられ毎日御朝食の後油塗りの御召衣を召させられて器機に油を注させられ垂水に御出遊ありして驟雨忽ち来つて御操縦を悩まし器機に故障を生じて自動車動かずなりたれば飛び下らんとする池田を押し止め大雨を事ともせられず、濡れにぞ濡れて頻に御修覆に中らせられ御手は油に黒み御服は穢れ真黒に成らせ給ひし事もありしとぞ、又先月二十五日午後の事なりき、明石より舞子御帰邸の砌り左海屋の門前に差掛らせられたるに当時姫路野戦砲兵十聯隊の残部御影へ演習の帰り路、舞子公園に於て休憩し居り車馬道を塞ぎて自動車を通じ悩ませられ御停車の上路の開くを待たせられたるが此の日は国民新聞社遊覧会ありたる事として自転車曲乗りの為め来合せ居たる明石町の大工通称米蔵なるもの大宮とは露知らず、余り御召自動車立派さにツカツカと大宮の御側近く進み寄り熟々打ち眺め「ヤ、コリヤ立派な自動車や、お前さん、何処から来やはつた」と頓狂声もて問ひ奉りしに大宮は御声低く「私は神戸から来ました」と御答あらせられたるが大工は其大宮殿下なる事を側の人より注意せられ頭を抱へて引き退きたるが暫くして砲兵隊長も斯くと知りてや俄に命を下し最敬礼を行ひぬされば前記の大工、以来之を以て身の光栄と誇り「己は畏れ多くも有栖川宮様と御物語致した手前達の夢にも見られぬ光栄だ」と逢ふ人毎に語り居る由なり

明治41年7月26日（報知）

●有栖川宮殿下御危難を免れさせらる、御召の自動車焼失す

〈有栖川宮威仁親王殿下には廿五日家従岩木広道外一名を随へさせられ自動車に召され多摩川の鮎狩に赴かれ一日の御清遊あり午後八時半頃自動車にて御帰路を急がせられ赤坂区青山南町五の五某酒店の前に差懸られしに如何なるハヅミにや前燈のアセチリン瓦斯より発火したるを運転手は気付かず猶も速力を早め風を切つて同町宮益坂に差懸りし時火は風に煽られしため忽ち車体に燃え移り遂に石油発動器に入りしかば猛烈なる勢にて火煙は車体を包みしより宮殿下を始め奉り扈従の人々も大に驚き一方車を停て消火に尽力すると共に宮殿下の御身边を護衛申上げしが余り火勢の激しきより南町一丁目にては出火と思ひ警鐘を打鳴らせしかば青山分署より巡查廿名駆つけしに此次第と判明しかば早速赤坂分遣所に急報し憲兵の出張を乞ひ宮殿下は直ちに人力車に召され憲兵を随へさせられ御恙なく御帰邸ありしが石油の火なり且つ車体はペンキ塗りなれば中々に近寄ること能はざりしが漸く車体の半を焼きしのみにて鎮火せるが有栖川宮家よりは家従を出張させ若干の御下賜金ありたり

明治41年7月30日（報知）

●有栖川宮殿下自動車隊を組織せらる、来月一日立川の鮎御獵

〈有栖川宮殿下には夙に自動車の御嗜み深く御手づから把手を執らせ給ひ自由自在に操縦運転あらせらるるが今回宮殿下の御発意にて部下にて自動車を有する日比谷平衛門井上角五郎増田太郎氏等十三氏の実業家を集め自動車隊を作り来月一日府下立川町に遠乗り多摩川にて鮎狩をなし半日の清遊を試みらるる由なるが此御催しを漏れ承はりたる斯界の數寄者は是非とも御伴せんものと願ひ出づる者続出し同日は一行午前八時より九時迄の間に日比谷公園にて勢揃ひをなし出発する都合なりと〉

明治41年8月2日（報知）

●自動車隊の遠乗、有栖川宮殿下把手を執らせ御先導をなす

〈有栖川宮殿下自動車乗用御奨励の御意に基き今回組織せられたる自動車遠乗会は予報の如く一日午前九時孰れも其愛用の自動車を飛して日比谷公園霞門外に集合せるが当日は殿下が平生親しく把手を執らせ給ふダラック号を始めとして澁沢男爵の所有にかかるハンバー号中上川次郎吉氏所有に属し快速力を有する日本製某号の外番外なる吾報知社自動車を加へ凡て十台と註せられたり、斯て一同は有栖川宮邸前なる葵坂下に集合し同廿分輪勢勇ましく運転を開始したるが其参列自動車左の如し

第一号	ダラック号	殿下御座乗
第二号	ハンバー号	中上川次郎吉氏外四氏
第三号	東京自動車製造会社製造	長岡少将外二氏
第四号	欠名	矢野恒太氏数氏
第五号	同	高田正一氏外数氏
第六号	フォード号	小栗常太郎氏外数氏
第七号	マセゾン号	村井吉兵衛、日比翁助氏外数氏、溝口曾我子爵令息
第八号	欠名	佐々木伯令息夫妻森村夫人関谷令嬢
第九号	ハンバー号	技師数氏
第十号	ターボート	写真技師外数氏
番外報知		本社特派記者

此破天荒なる壮挙を見んとするもの沿道に群集し赤坂溜池通より新宿迄は道路の両側の観覧者堵の如くに集れり、之れより左右田畝の間に入るや一隊の通過する道路の畑塵濛々として前後を埋め前車従車の間の物色頗る困難に加へて臭気益甚しきに拘らず殿下には海軍将校の御軍服軽げに厳格なる態度を以て車中に在され其間に奉迎諸氏の方を時々御覧なされてや最御機嫌にて打笑ませられぬ殊に午前十時廿分頃塵一つだけに止めず街路を掃き清めて打水し軒頭に日章旗を掲げたる多摩郡神代村字調布町附近御通過の御時はさも心地よげに左右を御覧遊されたれば並居たる奉迎者は感に堪へず仰ぎ見ず、心からなる誠意を最も深く表したるものは自宅の居室より遙に拝跪したるものさへあり、午前十一時廿分東京日比谷公園より約七里強の行程を約二時間にして多摩

川の沿岸立川町字日野古戦場の河原に到着したる一行は此処に一旦下車したる上名代の鮎漁案内者丸芝方に休憩したるが殿下には少しも御疲労の体も見えさせられず当日の同行者たる長岡將軍と親しく御物語あらせられつつありしが十一時五十分頃更に一同自動車を列ね其地より約廿丁逆行し字谷保村天満宮境内の緑陰風涼しき芝生の広き処に立食閑談し前後八里の行程に於ける限りなき感興を互に語合ひしが有栖川宮殿下には御都合により鮎漁の後午後三時御供奉の一台自動車を従へ自ら把手を執り御帰邸相成りたり（一日正午立川にて特派員）

明治41年8月2日（報知）

●自動車万歳，長岡少将演説

〈有栖川宮殿下の御令旨に依て昨日都下の自動車所有者が殿下に供奉して自動車を連ね多摩川へ遠乗りを試みたることは夕刊紙上に報道し置きたるが谷保村の天満宮境内に於て食事中一行中の陸軍少将長岡外史氏は立て一場の演説を試みたり其の要旨に曰く

殿下並びに諸君

自動車が我国へ輸入されてより日尚浅きも，報知新聞は即之を新聞の營業に応用し，三越呉服店は之を以て呉服を運搬し亀屋は之を以て酒を運搬しつつ有り，我が陸軍に於て一両を購入して目下試験中に属す，余等の理想は漸次之を大砲にも輜重にも用ひ又兵の運送の大部分に之を用ひんと欲するなり

今や我邦は地形其他の関係上未だ欧米の如く広く自動車を用ふるに至らざるも，本日の遠征に加はりたる両数は未だ多からずと雖も是れは遠征隊の第一回なれば将来我邦の自動車発達史に特記さるる者なり，而して此会合の成立したるは，全く殿下の御庇護に依る者なれば，茲に我等は熱誠を捧げて殿下の万歳を三唱し，尚併せて自動車の万歳を唱へんと欲す
小将の発声にて会衆一同起立して，殿下の万歳を三唱し尚自動車の万歳を唱へたるが，之に次で矢野恒太氏より自動車倶楽部設立に関する演説ありたり〉

明治41年8月2日（時事）

●自動車遠乗の壮挙，有栖川宮の御出遊，隨行紳士等の光栄

〈自動車が多摩川沿岸までの遠乗り聞いても心行き神飛ぶ程の壮快である，重量は二噸内外の彼の車が十一台も風を切つて軽く走る光景は僻地の人が眼には怪物が疾駆するとも見ゆるであらう此壮快なる遠乗りは兼てから自動車を御愛用あらせられる有栖川宮殿下の思召で市内で日頃自動車に乗もの或は此趣味を解するもの五十名に隨行を許されたから晴れたる空の八月一日矢の如く走る快足の車は午前八時までに日比谷公園霞門外に参集した，是等の自動車は渋沢男所有のハンパー号，中上川次郎吉氏所有の東京自動車製作所第四号，森村市左衛門氏所有の同上七号日比谷平左衛門氏所有同上第八号，小栗常太郎氏所有のフォード号，古河虎之助氏のマセソン号，大倉喜七郎代所有フヒヤット号で別に応急の修繕用としてハンパー号貨物運搬用としてクレメント号さへ加はり都合九台の車が軸を並べて用意の整ふのを待受けて居るのも中々壯観である，一方には大倉吉田中上川日比谷の諸氏汗も淋漓と諸般の設備に奔走し日も漸く暑からんとする九時此

御壮拳に隨行の栄を蒙つた中央の水田，朝日の臼井，毎電の松内，報知の西村及び記者の五名も夫々予定の車に分乗した，記者の乗つたのは下り藤の定紋ある森村氏所有の四人乗リモジン型で実用的に出来て居る腰掛の塩梅，内部の裝飾流石に製作所の苦心が現れて居り馬力は十二で運転手は色の黒い老練家川口氏であつた，九時過順序好く何れも二三十間の間隔を以て溜池通りに出て右手高台に殿下の御邸を拝する辺りに憩ふ間もなく殿下は早くも鼠色堅襟の御洋服にて極めて御軽快に親しく把手を握らせられつつ英国製三十五馬力ダラック号に召して御着あるや一同に御会釈あり直に殿下の御車を先頭に十一台の車が路を紀国坂より四谷新宿の大通も夢の間に甲州街道をば真一文字に走る，道路は坦々砥の如く村民何れも凝視して一行を迎へる不断の涼風は腋下に起りて樹間の蟬の聲が常に背後にのみ聞かれるのでも如何に走力の速かなるのか知れて壮快は此上もないのである帝国ホテルから立川まで約七里で単独に行けば四十五分で行かれるイヤもつと僅でも達するのであるが此日は十一台が各々連絡を取つて規定の間隔を保つて行くのと万一の危険を慮つて速力も鈍くしてあつたが夫れすら十一時二十分に立川在の藪村に着いた此処から川まで三哩自動車後返りするまでの少時の間を殿下は御機嫌美はしく御疲労の体もなく隨乗車の一人長岡少将が何廉申上ぐる写真の談話を聞かせられ十ダースの内漸つと二枚出来上りましたとの話には微笑を含ませられ「夫れだけ撮れば好い」と笑はせ給ひ「幻像も自分でしなくては面白味がない」杯種々の御物語ある内に車は同村鎮守天満宮の境内で梅林の傍に一流の人造瀑布がある樹陰涼しき処に停まれば此処にて立食の饗応があつた殿下を中央に左右に居流れた極めて平民的な饗応畏れ多い限で然も一同には折詰と粽まで下賜されたのである頓て長岡少将は一場の挨拶に次で自動車の利用を説き矢野恒太氏又自動車倶楽部設立に付ての談話があつて最後に少将の発声で殿下の万歳と遠乗会の万歳を三唱してからは懇談容易に盡きない殿下も終始御満足の有様で曾て御外遊中「伊太利皇帝に自動車の招待を受けて初めは余り好い心持もしなかつたが帰りには斯様に愉快な事はないと思つた」と言ふ御懷旧談もあつて興味泉の如く風の涼しい森の間遠雷の殷々と響くのさへ時に取りつて興味がないではない夫から社殿で消火薬の実験があつて愈々帰途に就いたは二時七分，一瀉千里軒毎に国旗の翻れる中を驀然奔馳する約十四哩，十二社に来た時は三時二分前であつた，斯くて元来た道を三年町なる殿下の御邸に参集し美盡した階上の大広間で格別の思召を以て一同に氷水の御歓待あり「御苦勞であつた」との優渥な御辞さへあつて茲に目出度散会した熱さに喘ぐ多くの人々は恐く此快味を解しないであろうと独り微笑みながら謹んで殿下の浅からぬ御厚情を感謝し奉るのである（菱生謹記）

明治41年8月5日（大朝）

●有栖川宮御来遊（日光）

有栖川宮殿下には自動車にて自らハンドルを執らせられ有馬武官外御附人五名及び東京自動車製造所主任吉田真太郎等陪乗他の一両には布目御附武官ハンドルを執り姫宮並に御附女中三名四日午前十一時半宇都宮御着地方裁判所に御休憩奥検事正の御先導にて同所楼上会議室にて御中餐後午後一時御出発四時半日光御着日光町長，警察署長等の出迎を受けさせられ旅館神山に御投宿

相成りしが長途の旅御疲勞の爲牛乳を取らせられ御夕餐の後漸時御納涼八時過二階の御寢所へ殿下其の次に姫宮其の次に御附女中の順序にて御一泊相成りたり同旅館は昨年故裁仁王姫宮御同伴にて御投宿相成りしに此の度若宮殿下の御姿見えざりとて主人は懐旧の涙を催しつつ御機嫌を奉伺せりと

明治41年8月19日（大朝）

●有栖川宮殿下（若松）

〈有栖川宮殿下には姫宮殿下及御附海軍武官、園田家令を随へさせられ十七日午後三時三十三分翁島駅御着自動車にて猪苗代湖畔長浜の新築御殿に成らせられたり〉

明治41年9月9日（神戸）

●有栖川宮御別邸（東京電話）

〈有栖川宮御別邸は本年三月登記を終り四月より工事に着手し昨今大部分落成を告げたる由にて敷地総坪数は二百四十町歩にして敷地内には小金井、長浜の兩部落其他の部落並に小倉山、名倉山の山脈を含む高台にして本館の建坪六十坪、事務所三十坪、自動車置場及び小者控室三十坪の三棟ばかり本館は南面に猪苗代湖全体を一目に見下し風景絶佳なり、東宮殿下御座所は本館楼上十五疊を以て充させられ御書見室には次の十二疊御寢室は其次の二十疊を以て充させられ何れも南向にて湖上を見渡し得る室なり〉

明治41年9月13（時事）

●自動車旅行、東京より猪苗代の有栖川宮御別邸迄（竹内生）

〈曩には有栖川宮殿下の御思召で多摩川沿岸まで自動車遠乗会が催されたが其後同殿下には自働車で日光へ御旅行あり其所より更に汽車に召されて今回御新宮に相成つた福嶋県猪苗代湖畔翁嶋の御別邸へ御避暑として赴かせられた、それは去月十七日の御事で同月下旬大倉喜七郎氏と東京自動車製作所主吉田真太郎氏とへ畏くも同殿下より自働車で来て見よとの御召があったので二氏は此御沙汰を非常の光榮とし直に自働車旅行を思ひ立つたが生憎雨続きで延び延びになり本月六日漸う出発することとなつた行程は鉄道で百六十五哩、自働車は道路の都合で非常に迂廻するのであるから或は三百哩にも上らうか夫れを二日で乗付ける予定なので先づは近頃壮快な旅行といはねばならぬ而して予は図らずも此壯遊を同じうすることを得たのである

▲**出発の光景** 六日は曇天ながら何うか持つだろうとの予想で午前七時約の如く赤坂葵町の大倉邸へ行つて見ると喜七郎氏は既に藍鼠大格子縞の旅行服といふ頗る軽快な扮装で従者を相手に自働車部屋の前のタタキに伊国トリノフェット会社製四十五馬力最高速力六十哩五人乗車根なし旅行用の自働車を引出し出発の準備をして居つた頓て吉田氏も来て共に試運転をするいよいよ之で宣しいとなつたのが八時過ぎそれから大倉氏は運転士の格でハンドルを取り吉田氏之と並んで機関士の任に当り且つ地図を按じて嚮導をする、後部には大倉氏の従者一人と予と二人相並んで座す此人も亦種々の仕事があるので晏然手を拱して居るのは予唯だ一人

▲**先づ中仙道を取る** 九時遂に大倉邸を出た既に此行の鹿嶋立ちである順路は琴平神社前の河

岸から虎ノ門，桜田門から和田倉門を経て神田橋通りを御茶の水橋に出で本郷通りから追分を曲つて中仙道へ出た一行が此道を選んだのは午前中は千住街道が青物市で雑沓して居るから多少遠くても此方が反つて早いと云ふのであつた市内は兎に角追分からは路も狭く住来の方は自動車に馴れず荷馬車は続く馬は来るといふ有様で思ふ様に速力を出すことが出来ない，併し此を出抜けて弥々街道へかかつてからは流石に道もよし人は少し多少の注意を要するのは駄馬，荷馬車許りであるから吾々は疾風の如く砂礫を捲いて板橋，蕨，浦和等を突貫し大宮へ着いて時計を見ると十時であつた

▲馬駭き雞犬驚く 大宮からは中仙道に別れて岩槻，粕壁，杉戸を過ぎ幸手の町を通つて利根川土手に出た何分自動車はまだ珍しいのでその唸り声を聞き其形を見る人々は驚き慌てて往来を彼方此方と走り廻るので予は車上私に膽を冷した人ばかりではない馬も駭く雞犬も驚く気の強き犬は驚き極つて狂せる如く自動車目掛けて吠え立てたが車上からは蚊の鳴く程にも聞えない

▲自動車の渡船 斯て利根川を右方に見て蜿蜒たる堤上を走ること里許，栗橋の渡しへ出たのは十時四十五分，前日来電報で用意させた大船へ車を入れ膽煎りの男船頭八人に棹をさせた兩岸は栗橋古河の人が総出になつたかと思はれる程の見物で警官二人宛之を取締つて居ると言ふ

物々しい光景，渡しに費すこと十五分，渡賃六円とは随分廉くない，十一時古河を発し間々田，小山の二駅を過ぎ右に〇糊たる筑波，左には遙に足尾を望み漠々たる青田を縦貫する街路を進んで行つたが此辺では充分速力を加へたの其疾きこと矢のやうだとも人は見たらう石橋，雀・宮を過ぎ出発より正味三時間なる零時十五分で宇都宮停車場に着た(未完)

明治41年 9月14日 (時事)

●自動車旅行 (続) (竹内生)

▲自動車の汽車乗 宇都宮より先きに鬼怒川があつて此川には架橋なく自動車を渡す程の渡舟もないので止むなく同駅から法積寺駅迄十哩車も人も汽車に乗る事となり停車場楼上で昼餐を喫し一時五十五分発車，二時十五分法積寺に着き降車に費すこと三十五分停車場を発し村娘，野童の歓呼を受けながら代家，矢板を過ぎた，此辺道路を横ぎる小流れ幾十条，橋を架して土を盛り其上に砂利を置いてあるので遠くから望むと宛然平地と同じであるが愈々自動車が渡つて見ると後輪が屹度跳上げられる，乗慣れない予はその都度車の上で鞠の如くに翻弄され甚しきは二尺余りも跳上るべく余儀なくさる事もあつた

▲鶴越の鷲尾 斯て馬市に名を得た那須郡野崎村字沢なる箒川辺に出た此所は往年鉄道橋上より列車を河中に陥れた場所の下流半丁程の所で路に架けた渡橋が去月の出水で流失して居る，渡しは田舟程の舟一艘是では，到底渡れぬと大当惑，何うしたら良からうかと思ひ迷ふ間に何処か

(写真一五) 「利根川にて自動車の渡船」

明治41年 9月13日付時事新報から，大倉・吉田の翁島行



ら降つたか車を囲む者忽ち二三十人、其中の
分別顔の四十男に道を問へば之から一里半を
迂廻して佐久山町に行くと橋があるから夫れ
より太田原に出て西那須に出るが宣からうと
言ふ然らば相当の礼をするから此車に乗つて
呉れと鶴越で鷲尾を見付た思ひ、その案内で
佐久間町の橋を渡る、案内の男最初は此橋迄
と言ふ約束であつたが何が扱て生れ落ちて自
動車と言ふ物を始めて見て而かも夫れに乗つ
て礼金さへ貰へると言ふ様割りの好い話は
ないので先生中々降りる気になれず此先き一里半の太田原迄行くと序に西那須迄行きませうと言
ひとうとう西那須迄頼まれもせぬ案内をしたも可笑しい

(写真一六) 「自動車回顧橋を渡る」

明治41年9月14日付時事新報から、大倉・吉田の翁島
行。



▲塩原に入る 停車場前の茶屋に入ったのは四時卅分沓茶に咽喉を潤して案内者は汽車で帰ら
せ同四十五分此所を出た是よりは道に一箇所の曲角があるのみで夫れからは約三里が程真直な而
かも担々砥の如き道であるから此で始めて四十五哩の速力を出して塩原の山麓関谷へと飛んで行
く其快何物かよく之に比すべきといひたい位、入勝橋を過ぎて幾うねりする坂を登り群山重疊せ
る間に分入つて迂余曲折する箒川に沿ふ見上る右は削り為したる断崖幾丈、見下す左は谿谷数十
仞、一瞬にして一峯去り一咳の中に一鬱来る斯かる山道ではあるけれども大倉氏が操縦の巧みな
る運転に些の渋滞なく車早ければ山谷の変化また早く四囲の風物殆んど端腕に違がない絶勝を迎
り迎りて浴客を驚かしつつ福渡戸の升屋に着く時は五時十五分此日行程約百三四十哩、雨は遂に
降らず無蓋自動車の旅行には頗る好都合の日和であつた旅装を解いて浴槽に塵を洗へば嵐気爽
涼、単衣に綿入を重ねて快く映餐の膳に向つた (未完)

明治41年9月17日 (時事)

●自動車旅行 (続) (竹内生)

▲試みに全速力 涼々巖に激する箒川の水声に夢を破られて七日午前六時床を離る、今日も曇
だ、予等三人は直に旅装をととのへ八時朝食を喫し升屋の店員を案内者として天狗岩、野立石、
七ツ石、龍化ノ滝杯の勝景中に自動車を走り古町までの見物を済ませて旅館に引返しよいよ八
時四十分塩原福渡戸を出発した露まだ霽れぬ沿道の風趣は昨日に比して又た格別の眺めなので歩
かば嘸と自動車の早さを啣つ、関谷からは道の好い那須野原、試みに全速力を出して見やうと大
倉氏は言ふ前にも記した通り最高速力六十哩だ、前田の四十五哩でさへ随分速いと思つたのが又
十五哩増さうとするのだ、何んな工合かと予は半ば危ぶみながら用意の塵除け眼鏡を掛け帽を被
り直さうとする途端に車は即全速力を出して疾風迅雷の勢ひで突進する、忽ち帽子を吹飛ばさ
れてハツと思ふ間に四五丁を走り過ぎたのを後へ引返して貰つて辛うじて拾ひ取つた斯くも高い
速力で走つて居ても停車するのは頗る容易で馬車の八分の一の距離で止るとのことである之で人

を轢く杯と言ふのは不熟練か不注意に基くのであると大倉吉田の二氏は言つて居た千本松原杯はホンの一瞬間大倉氏は笑ひながら頭痛はせぬかと予に尋ねる其後も折々振返つて予の面色を窺ふのである、然し予は既に一日の経験に依て乗り心地を覚えたのと十何年来風邪の外に病を得た事のない頑健な身体であるので幸に何の苦悩も感じない愉快々々と呼んで居る中に早や西那須に近づいた三嶋と言ふ所から此絶好の道路即ち三嶋知事の大英断に依つて作られた担途を見捨てて白河街道へと入り込む

▲川を乗切る 道は広いが余り上等の方ではない夫れに可なり高低があるのみか折々前日の様な橋の土饅頭を越えるのでコトンコトンと車は其度毎に飛上るが予はまた前日の阿蒙でないから可い工合ひに腰を浮して調子を取ると格別苦にもならなかつた斯うして頓て黒磯間近の蛇尾川の岸に出た川幅は三十間許りで水は三条に流れて居る其間は石原で渡船を要する程の水幅でもない人道には素より板橋が架けてあるけれど我自動車の通る丈けはないので儘よ乗切つて仕舞へと凸凹極りなき石原に馬力を加へて乗込み流を乱して押渡つた車の回転が早いので車の掻く水がザツザツと高さ四五尺にも及び車上の予等は頭から水を被り忽ち濡鼠になつて仕舞つた併し出発前から少々の兩位には驚かぬと言ふ覚悟であるから宇治川でも乗切つた様な勢で武者振ひ一番、水を拂うて車を駆り黒磯、黒川等の駅路を過ぎた

▲馬群の中を突過す 此辺四方皆山で路の高低極りなく数里水田を見ず道路に沿うた両側の畠際には桔梗、芍薬、女郎花扱ては名も知れぬ千草が咲乱れて見るも中に優しい景色だ山道には小部落が到る処に点在して居る、けれど自動車の上からは警察署、役場、郵便局等の看板に依つて僅に地名を読み得る丈けで是等の看板を見外すか其設けのない土地の標札などは字が小さくて目を注ぐ違もなければ見た処で判る筈もない、と見ると野に放し飼ひの馬が所在に草を食んで居る当歳の子馬は親馬の尻に喰付て親馬が歩けば歩く止れば止ると言ふ有様で頗る呑気だ人間の目にも甚だ愛らしい馬を驚かしては気の毒だと言ふので自動車は自然速力を緩める夫れでも時々自然界和楽の園を騒がして親が跳ねると子も驚き怪訝な顔で凝と視て居るは頗る滑稽だ一時廿分白河町に着く、同町は明八日東宮殿下が御立寄りになると言ふので停車場附近には団体学校等の奉迎場所を指定した建札が立てられ町が何となく賑つて居る此間を疾駆するので見物人堵を築き中には殿下行啓に就いての任務を帯びて来たものかと思つた人もあるらしい（未完）

明治41年9月18日（時事）

●自動車旅行（続）（竹内生）

▲犬猫甚だ臆病 白河駅を素通りにして山間に入る此辺り道路を挟みて立てる赤松遽々然として甚だ風趣に富んで居る駛走幾里、高低極りなく水田全く絶えて四囲唯だ陸稲を見るのみである小駅幾ツを過ぎたが此辺りの犬猫甚だ臆病で自動車を見ると一目散に遁走する殊に可笑しかつたのは恋する猫でもあろうか路傍の家根に戯れて居た二匹が車のウナリを聞いて慌てて飛下り迷つてとうとう溝渠に陥つた事である

▲飛禽翼を縮む 此辺り小鳥多く両側の雑木林から群立ちて右往左往に迷惑ひ中にも度を失つ

た幾十羽の自動車に先立つて飛んだけれど何うして中々及ぶ事でないで果は翼を収めて地上に落ちんかと思はれたが鳥も去る者辛くも一方に血路を求めて山路へと逃げ去つた、矢吹、須賀川を過ぎて郡山はもう間近い、日出山の田甫に掛ると両側の稲田良く熟して頭重げなるも嬉しい

▲虫族の死屍 余りに犬や猫や鳥を驚かしたので天の咎めを受けたものか機関の調子狂つて速力意の如くでない幸ひ此所は田甫中であるから取敢へず修理をしようとして車を停めたのは十一時三十分、同車を降り修理にかかると相変らずの見物が囲繞する予は邪魔にならぬ程度に人を払ふ此所一寸巡査の役廻りであると見ると自動車の前面空気孔の開きある金板の前面には蝶や虻や其他名も知らぬの虫が其気腔に首を突込んで死んで居るが触つて見れば何れも固着して居て放れない何うした訳かと考へて見れば先刻塩原から出て六十哩の速力で駛走した時は飛んで居た虫どもが空気の圧迫を受けて固着死亡したのだ何様子が帽を飛した時分は眼には塵除け眼鏡を掛けて居たが其他の顔面に折々痛さを感じたのも道理である

▲粘つて居る 修理に二十五分も費して十一時五十五分出発しようとする時行方の田甫外れに町が見える見物の男に彼れは郡山かと聞けば小原と答へ郡山は彼の村の先だが小原と郡山とは粘つて居ますと言ふ粘つて居るとは喰付いて居ると言ふ事と覺つて見れば成程々と一行大に笑ひ笑声を置土産にして又々駛せ去る

▲汽車と競走 機関の修理成つて車更に軽快、早くも粘つて居る小原を過ぎ郡山町より左に折れて弥々若松街道に入る四囲皆山であるが此辺は比較的広潤である、あはれ汽車の通れかし快速を競べんと思ふ処に恰も好し行手に當つて蜿蜒として長蛇の如く這つて行くのが見えたソレ追付けと速力を加へると須臾にして追着いたが之は貨車であつたので些と張合ひ抜けの体、併し尚ほも競争の態度で行くと汽車の遅いこと忽ちにして後方遙の山陰に隠れて了つた

▲小坂峠を越ゆ 熱海を過ぎて山漸く迫り其中間一道の街路を横へる許りの山路に入つた郡山迄は先達つて軍用の自動車が通過したので見た人見ぬ人相半ばして居たが若松街道に這入つてからは全く自動車を見たことのない人ばかりであるから畑作の男草取る女の沿道を駈廻つて唯だ怪物が駛走すると吃驚して居る体が歴々と見える中山宿其他一二の小村を過ぎて進と道様々迫り山陰にして水清く右方に幾丈の瀑布を見た、此所を過ぎると行手は山で道全く尽きたりで見ゆる処に橋あり之を渡れば先に見上げた瀑布の上部に出た、小道を登りながら顧視すれば過ぎ来し道は幾十丈の脚下に落ちて危険極りなく自ら戦慄を禁じ得なかつた是れが小坂峠であるとは地図を見て居る吉田氏の教へた語であつた。

▲遂に猪苗代湖 此峠を越えれば暗から出た様に稍展開して見渡す彼方は峨々として聳え立つ磐梯山の頂、雲を被り夫れより左右に流れ居る山脈際涯を知らない最う近い近いと勇みに勇んで車を駆れば道路に沿つて清冽なる水が流れて居る小川の尽くる所、是れ即ち猪苗代湖で地名を山瀉と言ふ此所は湖の東隅に位する一駅で袋の如く湖を廻れる連山の其口の如くなる所である今流れて居た小川は故三嶋県令が猪苗代湖の水を郡山に落して附近に灌漑する為めに掘鑿した安積の疏水であるとのことであつた時に午後零時五十分（未完）

明治41年9月19日（時事）

●自動車旅行（続）（竹内生）

▲湖畔の昼餐 此所迄来れば最う安心、此景色を肴に昼飯にしようと思つて車を茶屋の前に乗捨て有栖川宮殿下御通行の為に新しく架けられた車通る可らずと建札のある橋を渡つて湖畔青松の下に敷物を延し塩原で用意して来た弁当を開く、日光は湖面の漣に映じて盤梯山を中心とする連峰の影清く風景の美恐らくは箱根の芦の湖、中禅寺湖も遠く及ぶまい一時三十分山瀉を發す

▲馬二頭逸走す 山県より翁嶋なる有栖川宮御別邸三里半といへばホンの一飛び先づ山瀉より湖畔の崖を通ずる道を奔つて郡山以来の田圃らしい田圃に出で更に松原に入ると例のモンペを穿いた一人の女、駄馬を曳いて来かかつた女は馬を驚かすまいと急いで手綱を引く、それが却つて馬を驚かしたらしく綱を切つて元来た方へと逸走する、ヤレ気の毒な此車に乗れ馬を押へてやらんと言ふと女は貴郎達行つてお呉んなんしよと辞みて乗らず去らば兎に角押へて渡さうと馬を追つたが馬は益々逸るばかり、すると其行手から又一頭の駄馬が来て此方から走て行く馬を見るや是も手綱を切て後方に奔り出して自動車で追へば追ふ程猛り立つて遂には二頭殆ど鼻を並べ宛も騎手のない競馬のやうな姿で奔る、しかも自動車は遂に二馬を駈抜けグイと車を横へたので馬は行手を塞がれて尚ほ其横を駈抜けやうとする、兎角する間に主なる女は追付いて馬を押へた一行は之を構つて又行途を急ぐ

▲宮邸に着す 馬騒ぎに数十分を費し遂に進んで翁嶋村に達した、前夜東京を汽車にて發し宮殿下へ献上の品杯持参した大倉氏の従者一人道に出でて一行を迎へ同じ事に乗込んで湖の彼岸を洗ふ長浜を過ぎ坂を上りて遂に有栖川宮御別邸に到着した時に二時十五分、塩原を立つて、以来の行程約百哩、曇天

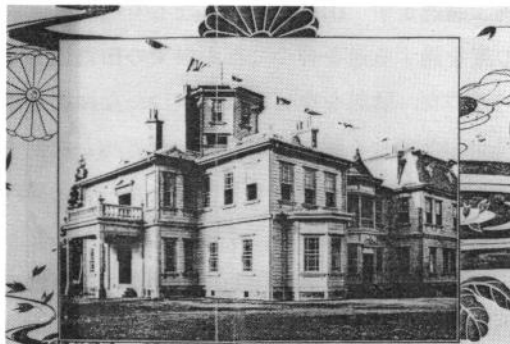
▲宮邸の混雑 当有栖川宮御別邸は明八日東宮殿下東北行啓の御途次御立寄り相成り兩三日御滞在遊ばされると申すので邸の内外上を下への大混乱、御普請掛の池田家従は汗も滴に多勢の大工を指揮して供侍小屋やら物置場やらの設備の執掌して居られる御庭前には三四十人の女が芝草を車で運んでは植付けて居る岡田家令や布目御附武官杯も何や彼の準備に忙しい模様であつたが一行の到着を快く迎へられ且つ其趣きをば岡田家令を経て宮殿下へ御披露申上げた

▲殿下に拝謁 斯くて大倉吉田の二氏及び予は事務所二階の二室を与へられたので其所で旅装を解きて用意の礼服に改め殿下の御沙汰を待奉ると頓て岡田氏から殿下が特に御会ひに成るから三人共本館へ来よとの使ひが来た依て大倉氏先行き吉田氏と予とは続いて伺候すると本館南方階下の洋風御客室に通された畏くも殿下には此時三ツ菊の御紋付きの御羽織に御袴を召され卓子を前に大倉氏と何やら御物語中で有たが予等二人の恐る恐る伺候せしを御覧ありて「遠方御苦勞であつた」と御語を賜り且つ座席を賜つたので恐懼措く所を知らず謹んで之に就くと間もなく一樣に紅茶一碗を賜はり今度の行程に就いて種々の御下問があつた夫れから大倉氏は携へて来た外国の自動車の写真や書物を御覧に供し一々御説明申上げ且つ大倉氏が英国で競走に加里二等賞を得たことや現今に於ける世界自動車乗り名人及び自動車製作に就いて有名な会社杯の事共を言上し

(写真一七) 「有栖川宮威仁親王」
明治41年11月15日，福島県教育委員会
発行「皇太子殿下啓記念号」から



(写真一八) 「有栖川宮翁島御別邸」
明治41年11月15日，福島県教育委員会発行，「皇太子殿下啓記念号」から



た吉田氏も亦足らざるを補つて御話し申上げると殿下には始終微笑を湛へ給ひ「成程々々」「左様であるか」と一々御挨拶遊された明日は東宮殿下御行啓遊さるる趣きに承り及びたるが自動車には召させ給ふまじきやと大倉氏より恐る恐る伺ひ上ると若し過ちありては一大事故殿下の思召あらば兎も角別に御勧めは申上げずなど玉音朗かに御物語あり此間約二時間にも渡り殿下には更に世界第一の自動車製造所なる独国マーセデーヌ会社の自動車御買上げの儀を大倉氏に命じ給ひ続けて休息するが宜からうと御労りの御言葉をさへ下されて大倉氏以下無上の面目を施し即ち御前を退出した(未完)

明治41年9月20日(時事)(竹内生)

●自動車旅行(続)

▲御邸の位置設備 夫れから三人打揃うて御邸内を散歩した抑々当御別邸は猪苗代湖の北，翁嶋停車場の西，若松街道の戸ノロ東に当る西翁沢の高地に在り海拔千七百五十尺，湖面よりの高さ三百尺，邸の面積約六十万坪，昨年四月の雪解けを待つて深草を拓き荊蕪を刈り山を崩し谷を埋めて御本館を始め事務所及び附属の建物を建築されたのである邸の飲用水は後方山上の清水を利用して沈澄池貯水池等の設けもあり夫から鉄管を埋設して本邸内の栓に水を導てある，又燈火用としては若松電力会社から特に三里余の電線を引かせ電話は若松市にも未だ設置してないので宮邸と此電力会社間に特設電話を置く若松方面への所用を弁じる様になつて居る，御本館の後方及び側面の二方山の尖端に二ヶ所の四阿が設けてあつて直に湖を俯瞰する事が出来る脚下は湖畔唯一の漁場長浜で岸を洗ふ漣幾丁，宮家御用のヨットは浪のまにまに漂つて居る東西四里，南北三里余，周回十七里の大鏡は翠巒四囲の間に開けて帆影遠く淡靄の中に出没して居る様絵にも筆

にも及ばない邸下の道路を隔てて少許の雑木林が在る其先数丁の湖中に此地村名の縁由たる翁嶋が浮んで居る此嶋の面積二万坪中央に鼻の如く突起したる小高い所がある外は平地で遠望宛然翁の面に似て居る、此嶋は宮家の御所有で追つては兎を放し御獵場とせらるる御計画もあると申す

▲晚餐を賜ふ 散歩から帰ると御本館から御使があつたので早速伺候すると先刻殿下に拝謁したお客間の隣室に当る食堂で岡田家令、布目武官接伴の役となり予等三名に晚餐を賜はった、終つて奥の談話室へ導かれたが此御室は畏くも殿下がお慰みに球を突かせらるるは所で球戯台が据えてある殿下の御居間は所で階上であるとの事だが明日東宮殿下が行啓在らせられるので殿下には折から御避暑中の美恵姫殿下と共に御避け遊ばされ南方湖面を瞰下する御室三間を東宮殿下の御座所に充て参らす事となった彼れ語り是れ話す中には過般御薨去遊ばされた裁仁王殿下の御噂なども出て一同父宮殿下の御胸の中をいと切に御察し申上げ覚え暗涙に咽んだ事である階上には殿下御二方在此らされるので長居は恐れと辞して部屋に帰り頓て御風呂を頂戴して此神聖の域に夢を結んだ

▲東宮御着の日 八日は東宮御着の当日である起き出でて見れば前夜更たける迄職工人夫等の此を先途と作業した程あつて庭上の芝生は緑の毛氈を展べた様例のモンペを穿いた男女の人夫は邸の内外の掃除に忙しい此日も亦雲天で風も可なりある先づ東京の十月頃の気候であらう朝食を済して邸の内外を散歩して見ると今日は御門に巡查二名が立番し邸内邸外此処彼処に警戒の巡查が配置してある夫れも其筈未だ露霽れぬ早朝から近郷近在の老若男女が身の分限に依じて思ひ思ひの紋服に礼を尽し拝観の榮を得やうとて御別邸附近を徘徊する者引きも切らぬ有様であつた

▲殿下の自動車 東宮御着の当時は栖川宮殿下には御所持の自動車で御出迎へ遊されるとのことで邸内の自動車部屋は早朝から開放され宮仕への人々其掃除に余念もない殿下御所持の自動車は英国ダラック会社製三十五馬力五人乗のダラック号と東京自動車製作所即ち今回の同行者吉田氏の製造した十二馬力四人乗りとの大小二両で何れも箱屋根付き瓦斯発動機関である

▲殿下の出御 午前九時を過ぐる頃宮殿下には鼠微塵の御単衣に濃い鼠棒縞の御袴黒緞の御羽織御運動帽を召させられて御玄関より出御自動車部屋の前へ玉歩を運ばせられたので夫れとは知らずに働いて居た一同は殿下の御心軽きに恐縮して思はず容を正したが殿下は大倉氏の自動車近く進ませられて機関其他の装置を御覧遊され何かと大倉氏に御下問在らせられたので氏は一々御説明申上げる殿下は最も御熱心に聞取らせられた後大倉氏を併せられて入御在らせられた氏は此時実技子殿下に拝謁仰付けられたとの事である

▲東宮御出迎 大倉氏は間もなく退出する、自動車の手入れも済む頓て昼餐を頂戴したが予等三人は今夕東宮殿下御着とあれば御邸内に在らんこと愈々以て恐れ多いから御途上に奉迎に就ては殿下御召の汽車の進行中自動車の馳走する有様を御覧に入れて御慰みに供し参らせやうと議に一決し園田家令迄宮殿下へ御暇乞ひの儀を申出で同氏及び布目武官を始め家従方へも一々前夜来の厄介を謝して午後零時卅分御別邸を発した（未完）

明治41年9月23日（時事）

●自動車旅行（続）（竹内生）

▲沿道の雑沓 皇太子殿下の翁嶋停車場御着は四時三十五分であると言ふので先づ翁嶋からは七里なる熱海迄往つて御通過を奉迎しやうと決し湖畔に沿うて往くと朝来見受けた紋付着用の男女は到る処に充満し其辺りの家々に休憩して用意の割子を開くもあり沂茶を啜るもあり樹陰、岩角に腰を下して時刻の至るを待つのもあり此等盛装した人々に自動車の塵を浴せかけるも気の毒と速力を緩めて田甫に出で夫れからは三十哩程の速力で例の山潟から小坂峠を通り安積の疏水に沿つて熱海に着いたのは一時廿分、此駅を御召列車の通過するのは三時十分と聞いて先づ路傍で一服やる

▲御目に留る 兎角する間に時は来り御召列車が進行して来ので予等は車を降り路傍に立ちて敬礼し御通過を奉送して夫れから自動車の運転を始め徐々に山路に掛つて見るも軌道に勾配があるので御召列車は徐行して居る、依て我自動車も之と並行の態度を取つて進んで居ると供奉車の乗員は何れも此方に視線を注いだ、即にして中山宿を過ぎて例の小坂峠へ掛ると長くも殿下が車窓に凭らせられ汽車と並馳する我自動車を御覧遊ばすのを拝したので御旅行中の御慰みにもとの微意の達し得たし一方ならず光栄となしつ峠を越ゆると御召車は隧道に入りて見えず此間御召車との距離漸く遠ざかつたので全速力を出して御別邸へと引還した

▲再び奉迎 其途上有栖川宮殿下が自動車に召されて翁嶋停車場へ御出迎へ遊ばさるるを拝したが此時殿下には海軍大将の御軍服を召させられ有馬家従運転手を勤めて居られた予等は車を止めて敬礼し御別邸に引返して東宮殿下の御着を待ち奉る間もなく有栖川宮殿下先づ御帰邸あり次で東宮殿下は供奉員と人車を列ねて御着遊ばされた、時に五時十分

▲若松に赴く 予等は再度奉迎の榮を荷ひ畢つて五時十五分出発、猪苗代湖の落口なる戸ノ口十六橋を渡り彼の白虎隊が奮戦したと聞ゆる戸ノ口原を過り螺旋して滝沢峠を越え忽ち眼前に展開する会津幾里の青田を眺めながら若松市に入る、予は此所にて大倉氏等に別る心算であつたが既に上りの汽車がなかつたので一行と共に東山温泉向滝に一泊した時は六時廿分

▲宮邸へ召返さる 明れば九日大倉氏は一行を率ゐて越後路へ自動車を駆る事となり予は辞して帰東しやうと其用意に取掛つて居ると電力会社から使が来て今日東宮殿下が自動車で行啓遊さる事となつたに付引返して来る様にとの宮邸からの御沙汰を伝へた其は願うてもない光栄と直様東山を出発したのは九時五分、例の滝沢峠を越えて約四里の山道を四十五分で乗切り同五十分御別邸へ着した

▲扈従の光栄 其時東宮及び有栖川宮殿下には長浜に浮べて在るヨットで湖の御遊覧中と承はり乃ち事務所に入つて休息午後一時十五分弥々自動車行啓に扈従する事となつたのは光栄極つて坐るに恐懼の念を禁じ得ない、行列の第一番は宮家御所持のダラック号で東宮殿下中央に御座あり左右には一条侍従長、原侍従御陪乗有栖川宮殿下親しくハンドルを取らせられ目御附武官御側に侍し次に同御所有の小自動車にて村木東宮武官長、山田武官、岡田宮家令便乗、有馬家従ハンドルを取る第三は大倉氏ハンドルを取り片山侍医、有馬侍従、西沢知事宮内官一人及び吉田氏

と予と陪隨して猪苗代町亀ヶ城趾に行啓遊ばされた兩殿下は旧本丸なる高地に設けたる四阿に入御四方を觀望あらせられる

▲前路の瀨踏 其の前面は定規で区画した様な青田の穂波美しくしく夫れを隔てて翠を堪ふる湖を望む景趣得も言はれずと眺めに耽る折柄宮殿下は布目武官を以て大倉氏に命ぜらるる様東宮殿下には猪苗代町より関都へ廻り此田圃の周田を巡りて山瀉へ出で湖畔を御別邸へ還啓遊さるる旨仰出された併し道路は果して自動車を遣り得るに適するか何うか、それを確めて来よとの仰せ、依て氏は予等と共に町會議員某を嚮導とし関都へ向つたが道路甚だ悪しく橋梁も不完全で高貴の御路としては適當でないことを認めて其由復命申上げたので此議員は御沙汰止みとなつた此事は当時の供奉中에서도二三の人々の外は知らない之に依つても自動車が如何に東宮殿下の思召に叶つたか解らうかと思ふ承る所では殿下は曩に有栖川宮殿下の自動車ダラック号が到着した時夫れに附て来た英人アンドリウス氏の運転手で一度御乗車遊され今度は二度目であると申すことだ斯て旧代官所跡で同地の産馬を御覽あり直ちに還啓遊ばされた

▲汽車は遅い 斯くて五時予等は宮邸を辞し再び東山に赴いて一泊十日大倉氏一行は越後へ向ひ予は一人別を告げて東宮殿下の若松行啓を途上に奉仰し十時十五分発汽車に搭じて帰京した自動車にて行動すること四日間、途上汽車の進行の転た遅いことを覚えたのである（完）

明治41年11月9日（やまと）

●自動車隊の遠乗会

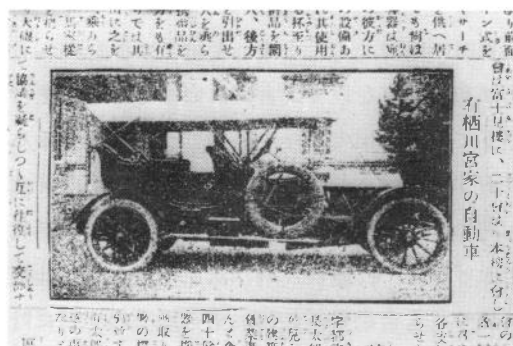
嘗つて有栖川宮殿下御奨励の下に多摩方面に遠乗を試み好成绩を挙げたる自動車遠乗会は八日有栖川宮家御慶事の良辰をとし大倉喜七郎、吉田真太郎、中上川次郎吉、森村開作の諸氏幹事となり武州大宮に第二回遠乗会を催したるが当日は早朝より参与の自動車は何れも夫々記号ある標旗を翻し磨き立てたる銀具に小春日和の光を浴びて日比谷公園運動場に参集午前九時一発の合図と共に有村信清氏のちどり号を先発として三井高保氏のホワイト号原六郎氏のハンバー号赤星鉄馬氏のパカード号の十数台を二列に分ち三越呉服店のクレメント号に一行用の糧食を搭載し砂煙り勇ましく馬場先前を一文字に順路大宮に向ひたるが同公園に於て中餐を認め午後三時迄清遊を試み二重橋前まで帰着散会する筈なりと

明治42年5月11日（報知）

●有栖川宮殿下の自働車溝に落つ

有栖川宮殿下には九日御用係有馬純篤氏外二名の従者と共に御愛用の自働車に召され御手づから把手を執り給ひて横浜へ御微行ありたるに其途中午前十時半頃子安村字入江川橋に差掛りしに折しも神奈川方面より材木を積載して来れる一台の荷馬車あり元より殿下の御召とは知る由もなく唯自働車の疾走し来れるを道路の左方に片寄りて其通過を待受けたる然るに此道路は不完全にして凹凸甚だしき為め御召自働車は荷馬車を避けんとして誤つて軒下の溝に落込み半ば傾斜して車両は泥土に深く喰込み抜き上ぐる事能はず村民等は唯立騒ぐのみなるが折良く同村駐在所の巡查石井銀蔵馳せ付けて殿下の在ますに心付き直ちに敬礼をなせし為め初めて村民も殿下なりと

(写真一) 「有栖川宮家の自動車」(メルセデス)
 明治42年5月31日付時事新報から



知りたり石川巡査は御用を承りしに有馬氏は車を揚げよと命じたるを以て更に同村宮森佐吉外十数人を督し丸太材木を以て漸く路上に戻し揚げ無事に御進行を続ける事を得たり尚は午後六時頃横浜方面より御帰京の途次同村通過の際石井巡査は沿道警固の爲め生麦迄出張したるが殿下には長くも進行を止めて有馬御用係りをして同巡査に御懇篤の御言葉を賜りたりと承はる

明治42年5月31日(時事)

●本邦無比の自動車, 有栖川宮の御乗用

〈有栖川宮威仁親王殿下が殊の外自動車を好ませ給ひ御操縦さへ至て御堪能なる事は屢々本紙上にも記したる所なるが昨秋世界第一の自動車会社と称せらるる独逸国スタットガルト市マルセデー会社に御注文ありて去月到着し此頃漸く御乗用までに設備整頓したり自動車は現時各国に於ける最新の様式を折衷し本邦には全く比類なき善美を尽くせる大形のものにて其構造の概略を記せばエンジンは瓦斯発動機にして機関は小なるも馬力は大なるものと同じく四十五馬力を有し速度六十哩を出すべく運転台及び車台はアルミニウムの打出しとなし中はバックフハローの皮を張りて内外共に真紅に塗り前面の風除け硝子は新式のウキルティン式を用ひ母衣は後部に畳み込まるべくサーチライトは一個一千燭光の物二個を供へ居れば全速度にて駛走し居る時にも尚ほ三町程先を照し得べく警笛の音響器は宛然汽笛の夫れにも似て十丁位の彼方に響き、最高速度計は勿論消火器の設備ありガソリンは四十ガロンを容れ其使用量を測るべきメートルを附しある杯至り尽さざるなく何れも新発明の特許品を網羅しあるのみならず運転台に二人、後方には三人並乗せられ横の腰掛けを引出せば更に二人を居らしめて都合七人を乗らしむべく最後部には抽斗ありて携帯品を容れ得べしといふ斯く四十五馬力をも有する事とて余程熟練したる者ならでは其運転容易ならざれども殿下は自由に之を御操縦あらせられ現に数日前御試乗あらせられし時にも小山田御附武官有馬家従を随へさせられ親しくハンドルを把らせ給ひて三年町の宮邸を御出発あり大磯に伊藤総監を御訪問ありて同総監、古谷秘書官及び韓国前内相宋〇〇氏を陪乗せしめられ箱根塔ノ沢に赴かせ給ひ即日御帰京あり此行程約百三十哩の多きに及びしも聊か御疲労の御様子あらせられざりし由〉

明治42年7月13日(信濃毎日)

●自動車隊の遠乗り, 有栖川威仁親王殿下

〈有栖川威仁親王殿下を始め自動車隊の一行は鎖夏空前の旅行として東京より自動車を走らせて山梨県より諏訪湖岸を横断し松本地方に至らんとする計画ありて行路自動車通過に付き危険の有無を諏訪郡衛に向け問い合せ来れりと云ふ(十二日午後二時上諏訪電話)〉

明治42年9月8日（河北）

●有栖川宮御着，越前松原堤防に於て御昼餐長町鉄橋御徒渉あらせらる

〈有栖川威仁親王殿下には帝国水難救済会総裁の御資格を以て今九日塩釜町に於いて挙行する当支部発会式に御台臨の爲め昨日午前八時福島猪苗代翁島御別邸を御出発自働車を召され御来仙遊ばさる之より先き新妻支部副長は白石まで奉迎御陪乗を申し上げたるが仙台は午後四時御着の御予定なりしも予て拝承するが如く殿下の自働車を御操縦遊ばさることは頗ぶる御巧妙なる爲め八時御別邸を御出発あせられたるに即ち十時半福島に御着而かも途中安達郡岩根村関下に於いて約一時間御休憩遊ばされたるのみならず処々農馬の狂奔に遭ひ御駐車遊ばされたること数次なりと拝承するだに其御手練のほど驚嘆の外なき次第なり翁島より福島まで二十余里約一時間にて駆けさせ給へり斯くて御車は本県に入り越河松原堤防に至りし頃正午を報じたるより同所に於いて御駐車御一行の小山田御附武官園田家令有馬家従新妻支部副長と御携帯の御昼餐を召上られたるが殿下には堤上に毛布を敷かせられて憩ひ給ひ稲の実りの良き事などを御物語あり夫より国道筋を仙台に向せらる時寺田知事は白石に於て下車同地より腕車にて途中まで御迎ひ申し上げたる処恰も刈田郡斎川村田村將軍祠の辺に於いて御車に遇ひ同所に於いて殿下に伺候し御陪乗午後一時二十分白石御通過同四十五分大河原御通過あせられ御予定より非常に早くなりたる爲め再び槻木街道に於いて御休憩午後二時二十五分岩沼御通過あり殿下には沿道幾万の奉迎を受けられつつ午後三時五分長町橋に御着あせらるるや之を合図に煙火を爆発して万歳を奉祝し茲に殿下は自働車を御駐めになり御降車陪従の一同も降車して戸田警視を先駆に工事中なる同橋を御徒歩にて渡せられたるが杉野技師同橋の工程を御説明申上げたり御召自働車は有馬家従操手して渡り橋の阿元に於いて再び御搭乗遊ばされ同所に奉迎せる在仙文武諸官議員学校長有志等には最も御丁寧なる御会釈を賜ひ新河原町より河原町南材木町両側に整列せる県市立各学校生徒の奉迎を受けさせられて御機嫌麗はしく順路六軒丁御旅館八木氏別邸に入らせられたるは午後三時二十分なりき〉

明治42年9月10日（河北）

●有栖川宮御発

〈水難救済会当支部発会式に台臨の爲め御来仙の総裁有栖川宮殿下には昨日早朝御起床に相成り御旅館に御迎申上げたる副総裁鍋島侯爵夫人会長吉井伯爵石樽村田両幹事寺田支部長新妻同副長等其他に謁を賜はり寺田支部長には疲れたらうとの御言葉さへあり玄関前に於いては各奉迎者にいと御丁寧なる御会釈を賜ひて御名残惜し気に御別れを告げさせられ鼠色の背広の御服に塵除けの薄紫色の御首巻を着けさせられて御料の自働車に御搭乗御隨員の小山田武官，岡田家令，有馬浅田両家従及寺田支部長に陪乗を仰付けに相成り午前八時二十分御出発御帰還の途に就かせらる御通過の各町戸毎に国旗を掲げて敬意を表し奉送まゐらせたるが南鍛冶町河原町より長町橋際までは御着仙の時と同様に各官衛長官各部隊長学校長議員銀行会社長並に諸学校生徒整列して奉送し長町橋にては工事未成中なるを以て特に自働車より御降車遊ばされ御徒歩にて渡せられた

る後再び御搭乗国道筋を福島翁島御別邸に向け御車を進めさせられたり時恰も向山に於いては盛んに煙火を打ち揚げて殿下の万歳を奉祝しまゐせたるが四十余里の田舎道の烈しき動揺を御身に受けながら片時も把手より御手を緩め給ふことなく往来の危険に御注意遊ばさる其御心労は拝察するだに恐れ多きことなりし尚殿下には当支部救難所及同組合に対し金百円を御下賜相成りたりと)

明治43年 5月30日 (報知)

●御快方に向はせられたる有栖川宮

〈有栖川大将宮殿下には去ぬる歳肋膜炎に罹らせられ数々の国手拝診まをしし末福島県岩代の翁島なる御別邸に移らせて病を養ひ給ひしが空気の新鮮、境の静寂はあれど秋風徐に来つて気温の御病軀に適せざるにぞ主治医は只管に御転地のほどを勧めまらせしかば殿下には実にも其忠言を容れさせられ四十二年九月下旬というに同地より舞子の御用邸へと転じ給ひぬ所は全国随一の好適地気候温和にして空気清澄なるに主治医として須磨病院長鶴崎博士が日夕拝診した時折り聖上の渥き御思召を以て岡侍医頭帝都より態々伺候して拝診まをし其の他有らん限りの手を尽くして御看護申上げし為め近来余程御快方に向はせられ室内の御運動は更なり庭園の御散歩にも出立たせられ御附の堀内家従を随へさせ園内の小丘に立たせて朝に加太岬より四国の峰巒雲霧の間に隠顕し近く淡路島の煙波に霞むを御覧ぜられて夕には男鹿、女鹿、鞍掛、竹の青螺夕照に映じて其の間に白帆の隠約せる様を賞し給ひ明媚の境に風光の美と相俟つて御心身の療養に努めさせ給ひぬれば臆ては殿下の颯爽たる御英姿を帝都の御本邸に拝するを得べし)

明治43年 7月1日 (時事)

●有栖川宮御近状、両殿下別々に御静養、前田家御案内御断り

〈昨年秋頃以来播州舞子の御別邸に御滞在中なる有栖川宮威仁親王殿下には久しく肋膜炎を患ひさられて御病床に親み給ひしも此頃は充分御快方に向はせられ日々庭内の御運動御差支なき迄に成らせられたるより御本邸に在します大妃殿下にも御愁の眉を解かせられたりと申すことなるが殿下には尚ほ暫く同地にて御静養の御見込にて当分御帰邸はなかるべく又久しく腎臓炎に罹らせられて葉山の御別邸に御在中の妃殿下には別に御容体悪しゝとにあらねど御病状の進退一定せず殊に御病症上御運動は却て害あれば常に平静に御身を持し給ふ必要より妃殿下にも当分御帰邸はなかるべしと言ふ左れば来る七月初旬に催さるゝ前田侯爵邸の行幸啓には妃殿下の御生家と言ひ同家より両殿下へ御案内ありたるも前記の如き御容体なれば当日の御台臨叶はせられずとて両三日前岡田家令を以て御断りありたりと言ふ又宮殿下には一昨年来夏季の御避暑邸として御新営ありし福島県猪苗代の御別邸へも今年は御出であらざるべく予て御愛好の自動車も昨年独国より御取寄せ在りしマーセデース号も昨年夏季に御乗用在らせられしのみにて本年四月更に御取寄せありしデムラ号 (機械は英国、箱は佛国製) へは未だ一回も御召しありしことなく何れも麴町区三年町の御本邸に蔵しあり今一台の小自動車は臣下の乗用に供し居れりと言ふ)

明治43年12月21日 (やまと)

●自動車協会設立

〈本邦に於て自動車を有する内外人の発企にて標題の協会を設立すべく二十日午後四時より帝国ホテルに参集し英国大使マクドナルド氏列席の下に相談会を催ふしたるが同協会は自動車にて本邦を旅行する人々の利便を図る事道路橋梁の改善を企図する事自動車は道路に於て通行者に妨害を与へざる様各自道義を重ずる事外国に於ける自動車所有者をして本邦来遊を歓迎する事等の目的を有すと〉

明治43年12月21日（やまと）

●自動車倶楽部の発会と活動の目的（英大使の希望）

〈天津み空に大怪鳥にも似たる飛行機の翔りし翌二十日本邦に於る自動車に関する社交機関として計画されつつありし日本自動車倶楽部成り其発会式を帝国ホテルに挙げたる事は二面記事の如くなるが定刻四時前より自動車の精華は怪獣の吼ゆるが如き響を立て護謨輪軽く続々として入り来る其主なる人々には英国大使マクドナルド、フレザー、シゾール、レスロイ、カーレルホラー、レフロイ、尾崎市長、大倉喜七郎、山本条太郎、久米民之助、西沢讓太郎、志村誠磨の諸氏数十名に上れり、一同着席するやフレザー氏先づ起って簡単に発会の辞を述べ会則を発表して賛否を求めたるに些かの異議なく満場一致にて可決大倉喜七郎氏之を邦文に訳し尚詳密に之を敷衍せり次でマクドナルド大使は長大の軀をやら壇上に運び自動車に対する日本人の同情薄きは洵に遺憾に堪へず夫は自動車が疾走に際して砂塵を揚ぐる等を嫌忌するなるべきも畢意道路の不完全なるに起因す是れ等の希望は茲に列席の尾崎市長の助力を懇願せざる得ずとして降壇すれば尾崎市長直に代つて登壇し自分は一台の自動車をも所有せざるが多大の趣味と同情とを有す大使の御希望に対しては今茲に断言するを得ざるも必ず近き将来に於て諸氏が希望を全うすべしとて拍手理に降壇是れにて式を終り内外人交々珍奇なる自動車談を闘はせ午後六時散会せり因に同倶楽部一切の事務は大倉自動車部の高田琢雄氏之が処理の任に当り当分帝国ホテル内に於て諸般の取扱を為すと〉

明治44年9月8日（国民）

●有栖川宮御近況、自動車の御研究

〈予てより舞子御別邸に御静養中の有栖川宮威仁親王殿下には御病中も猶軍事参議官として重要軍務の御諮詢に応へさせらる趣なるが近来は御病気も御快方に向ひ御気分も御爽快に渡らせらるる由にて曩頃も英国より二万円余の自動車一両を御取り寄せ運転手技師を御相手に機械を取外し新に取付けなど遊ばされ深き御興味を以て御研究の御様子なるが右は殿下少壯の時より英国に御留学ヴィクトリア艦に御乗組み諸機械を御研究遊ばされたる結果なるべしと拝察せらる又殿下には時々両陛下或は東宮殿下より宮内書記官又は東宮侍従を御使として差遣はされ御菓子葡萄酒等の御下賜ある聖旨の厚きを謝し給ひ其都度御丁寧なる御謝詞を述らるとぞ猶折々国風の御詠もありて高崎御歌所長に拝見仰付らるる由承はる〉

明治44年10月8日（時事）

●一都一日十万車（有馬有栖川宮家従談）

く有栖川宮威仁親王殿下には予て自動車に興味を持たせられ去る三十八年英国より御帰朝の際自動車ダラック号を御持帰りありたるを始めとして或は日本にて新たに製造せしめられ又は英国より最上のものを御取寄せ遊ばされたことは吾れわれ臣民の均しく仰ぐ所であるが去る四十二年御病気の為め舞子の御別邸へ御転地在らせられた以来は医師の御勧めに依り御乗用の事は打絶えられたが併し尚ほ其趣味は忘れさせられないのみか本年一月下旬には特に家従有馬純磨氏を歐洲各国に御派遣あり自動車の機械及び其良否扱ては歐洲に於ける其現況を視察せしめられた、其の折しも宮内省に於ても外賓接伴等の為め自動車御買入れの議が起り有馬氏の歐洲行を幸ひ同じく調査方を囑託されたので氏は其名誉ある使命に歓喜して早速旅程に上り去る八月下旬調査を了へて帰朝した皇族又は宮内省より自動車専門の調査に人を派遣されたことは勿論のこと個人としても専門の調査に行った人は先づ氏を以て嚆矢とするであらう依て氏の談話を揚げて歐洲自動車界の現況を紹介する

——以下略——

明治44年10月8日（時事）

●東京の自動車界

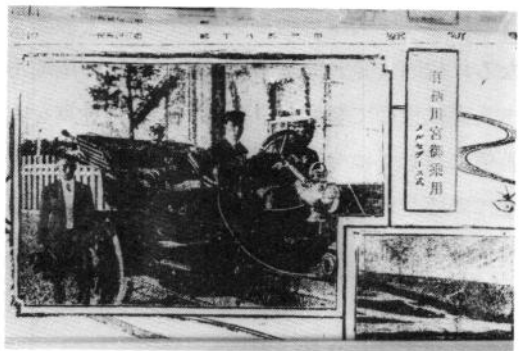
く——前略——

▲有栖川宮の御奨励 既にして三十六年頃外人が二三人本国から自動車を取り寄せて乗用に供した夫れと見るや三越呉服店も一台の自動車を買入れて広告旁々貨物用に使用したが是れが抑々日本人の自動車を使い始めた元祖であらうすると卅八年になって長くも有栖川大將宮には英国から御帰朝の際ダラック号自動車を御持帰りになり御自身でハンドルを

取って御乗用に供せられ且つ吉田某に命じて此ダラックを雛形に全部の建造を命じられた、その結果約1年半の後兎も角も東京で一台の自動車が出来上り今日でも尚ほ此車が宮家の御用とな○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○のデムラー号や独国一流のメルセデースなど云ふ何れも立派な車を御取寄せに相成り絶えず御愛乗在らせられたのみならず時には自らハンドルを取って東宮殿下を御乗せ申された事もあったと申す、兎も角殿下の御熱心なる奨励は頓て東京市民をして自動車の実用に適すると云ふことを覚らしむることとなったのである

▲自動車倶楽部 外国には自動車倶楽部なるものが設けられて自動車所有者の社交機関となり兼て之に関する種々の研究をして居るといふ事で東京でも本年になって日本自動車倶楽部なるものが設けられ事務所を帝国ホテル内に置いて東京横浜の自動車愛用者を会員として居るが其会員既に五十余人の多きに及び尚ほ地方の人も地方会員として入会を許すこととなって居る会長は大

（写真-10）「有栖川宮御乗用、メルセデース式」
明治44年10月8日付時事新報から。
注：後部座席は宮殿下、運転席は大倉喜七郎



隈伯、副会長伊東巳代治氏、尾崎市長、後藤男、渋沢男、英、独、澳の各大使等、委員長はフレザー氏、副委員長は大倉喜七郎氏等で会員は内外の華族、実業家等の有力者を網羅して居る会の事業とする所は機関雑誌発行、自動車専用地図の編成、自動車専用字彙、道路橋梁の調査改良方法、運転手の養成保護等、である

▲自動車瑣談 日本では是迄少数の自動車が製作されたが何分小規模の工場では製造しても引合はず左ればとて大資本の工場を作っても今日の所夫れ丈けの注文があるか何うかは怪しいので先づ当分は修理位に止めて矢張り機関は外国から輸入する外はあるまいとのことである夫れから自動車が盛んになって来たと共に貸自動車も大分見える様になった、今日の処六七軒で営業して十五六台は動いて居るが中々引張り足りないとの事である

——以下略——>

明治44年10月29日（報知）

●自動車卅五台の紅葉狩

〈帝国ホテル内の日本自動車倶楽部主催となる頃も紅葉の便よき廿九日三十五台の自動車隊を組織して武州高雄山へ紅葉狩の遠乗を試むる筈なるが当日は横浜各国の領事を初め三井の山本條太郎、大倉喜七西沢讓太郎藤原俊雄氏等に加ふる花の如き夫人令嬢百五十人余名参加する筈なれば秋晴の山村水廓時ならぬ壯観を極むる可し当は当日は午前八時までに日比谷公園音楽堂前に勢揃ひをなし九時出発霞門を出て永田町より赤坂見付に出て紀の国坂を登り四つ谷新宿の街路を馳せて甲州街道に出て約二時間にて山麓に着し此処にて一同自動車を降り婦人連は用意の山駕籠に移り内外紳士は徒歩にて山路を辿り山上にて昼餐をなし一日の清遊を終へて帰京に就き薄暮爽かなる頃紅葉の枝を家土産に散会する筈なりと此より先倶楽部秘書高田琢雄氏フレーザー氏と共に廿七日実地踏査を行ひ危険なる橋梁等は費用を支弁して修繕を加へたり此催しに就ては山麓の各村長八王子署長高雄山神職は非常に歓迎し種々斡旋の労を収る事を約したりと云へば蓋し当日の壯観察知するに難からざるものあり〉

明治44年10月30日（報知）

●六ヶ国の人種を乗せた卅二台の自働車隊

〈秋雨肅々と降り切る廿九日の日曜の早天日比谷公園運動場指して疾走し來たる自動車は二台、三台、五台、十台と午前八時を過る頃には早くも卅有二台を算せり

▲之ぞ日本自動車 倶楽部が発起して今日しも武州高雄山に観楓の遠乗りを試みんとするなり車上の紳士を点検すれば之れ見よがしに百馬力の自動車に悠然たる大倉喜七郎氏あり新式自慢の車上に把手を握る佛國領事ローテグ氏あり同じく白耳義領事ベスター氏あり其他京浜間に聞えたる自動車狂の富豪紳士何れも喜色満面にて面上を打つ雨も物かは時刻今と待ち構えぬやがて午前九時四十分大倉氏を先頭に三十二台の自動車隊は新宿通りを真一文字に甲州街道の泥濘を跳ねに跳ねて突進し始めたり、記者の乗れるは今夏富士登山に冒険を共にしたる馴染深き東京自働車会社の軽快なるハップモビルなり、長蛇の如き自動車隊が今や内藤新宿を一瞬の間に馳せ過ぎて

拍木の通りを矢の如く通過するの時なりき

▲**椿事は勃発しぬ** 椿事！、そは何事、柏木交番前に厳然と佇立せる警官の官服に何れの車台かは知らねども強か泥濘を跳ねかけたる一出来事なりけり警官は烈火と怒りぬ卅二台の自働車は大喝一下蜿蜒としての柏木の街路狭しと停車しぬ、取調べの結果は固より空なり怒心頭に発せし警官も只洗面作るに過ぎざりしは気の毒なりき此椿事勃発の頃より雨全く歇みてやがて秋天一碧拭へる如く晴れ渡りぬ一隊は踊躍して益々速力を増しタイヤを没する泥濘の中を西へ西へと突進すれば田園に啄む雞群は驚き騒ぎて中空に舞ひ上りて庭内に眠る犬の群は怒り狂ふて行先に駛撃して吠え猛る

▲**五宿、府中の泥濘** を突破して進めば行先は頓に開け武蔵野の大平原を越して澄み渡りたる西空高く富岳の秀峯を望みぬ更に多摩川の所々に架れる危険なる板橋を走り過ぎて八王子に入れば町民は町の両側に堵をなして見物し混乱雑沓を極む八王子署は殆んど全部の警官を派して此雑沓を取締る様の物々しき斯くして高尾山下の浅川村に着せしは方に正午前十分此所には青木浅川村長を初め高尾山薬王寺の僧侶土岐是空師執事高木正次氏等出迎へ二ヶ所に設けたる大緑門には球灯国旗を飾りて一行の歓迎準備至れり尽せり

▲**自動車は浅川村に捨て** 百五十余人の同勢或は山籠に揺られ或は健脚に鞭ちて上り約一里の高尾山頂へと走せり日、独、英、米、墺、伊の各国男女は互に助けつ助けられつ谷々峰に半は錦を染め出したる紅葉の美に憧れつつ足の痛みも打忘れて上へ上へと登る急坂極まれば又新になる峻坂現はれ登りては下り下りては又登る山深くなれば紅葉も亦従って麗はしく季節には稍早けれども深山の秋気は最とも爽かなり兎角して山上の薬王寺に至り着けば住職山本師は一行を百廿疊の大方丈に招じ入れて歓待至らざるなく東京より持せし折詰は開かれぬ

▲**麓て深山の霊場** には不調和なるナイフの音フォークの響起りて委員長の山本丈太郎氏及び委員フレザー氏の挨拶も間單に了りぬ住職山本師は更に一行を山頂の見晴ヶ原に導く真先に従ひ行くは元気旺盛なる西洋婦人の一隊なり彼等は極めて快潤に打興じつつスカートを高く細き靴の踵に木の根、岩角と踏み占めつつ登る見晴ヶ原は関八州を一眸に集むる眺望絶佳の山頂なり日、英、米、独、伊、墺の各人種は此大自然の美に酔ふ事暫時山麓を包む暮色に始めて我に反りて疾走帰路へと就く時に後四時半)

明治44年12月13日（時事）

●**自動車界、現下東京の車両数、自動車倶楽部発表**

〈——前略——〉

▲**倶楽部の事業** 東京自動車倶楽部は自動車所有者の増加に伴ひ会員も漸次増加し入会金は最初百円なりしを七十五円に減じ会員も一ヶ月五円なりしを三円に減じ大隅伯を会長として次第に発展せんとしつつあり此程自動車旅行者の便利の爲め西は岐阜より北は青森に到る間の廿六市町のガソリン油供給地の地図を編成して各会員に配布したるが自動車専用地図は目下編成中にあり自動車に附する会員大徽章も遠からず出来すべく運転手の信用調査も大に進捗したりと云へり尚

ほ近来自動車の増加に連れて運転手志望者多く同倶楽部に採用方を申込み者少なからず中には医師の代診杯もありたりと云へり同倶楽部には未だ運転手養成所の設けなければ同倶楽部委員長大倉氏によりて是れが設立の計画中なるが夫れ迄は助手として自動車所有者に紹介し居れり

——以下略——

明治45年5月13日（時事）

●自動車の遠乗り，村井別荘にて園遊会，横浜に飛行機を見る

〈予記の如く大日本自動車倶楽部にては新緑山野を彩りて春風肌に快き十二日第二回自動車遠乗会を催したり会する者東京より約二十台横浜より二十余台合計四十六台の多数を算したり目的地は大磯にして午前九時日比谷公園を発して先づ横浜に到り折柄飛揚中の水上飛行機を見物したる後道を旧東海道に取りて山緑に麦青き間を疾駆して正午過ぎ神奈川県大磯町に着したり

▲大磯町の賑ひ 此日大磯町にては軒毎に国旗を揚げ球灯を吊し有志者一行を迎て歓迎大に努たり予定の会場たる村井吉兵衛氏の別荘に入れば後庭海に面し入江に沿ひて広やかたる青松白砂の樹間に園遊会の催しあり和洋の食品を用意し村井氏の接待にて会する者内外人約百五十名外人には家族同伴の人多く日本人にても森村開作氏其他夫人同伴の人もありて賑かに一行は風景を賞しつつある間に余興の丸一の太神楽及び地引網の催し等もあり一同飲を尽して三時半同邸を辞し六時頃思ひ思ひに帰京したり

▲事故頻出 第一回の八王子行きには何等の事故もなかりしが今回は往時大森町に於て五歳の女兒一人泥除けに触れて負傷せしより倶楽部事務員高田氏等は一行に後れて負傷者を自動車にて品川町戸塚病院に入院せしめたり其外途上，火を失したる者あり溝に落ちたるあり機械を損じて途中より引返せしもありたり

明治45年5月25日（国民）

●自動車専用渡船，栗橋の利根川渡津

〈東京又は横浜方面より日光に行かんとするには必ず栗橋の渡船に依つて利根川を横ぎらざる可らず特に自動車の如きは従来二隻の馬船を連結して暫く往来を為し其渡賃の如きも極めて不廉にして毎度二円を請求せられ自動車旅客の共に不便をと苦痛を感じ居たる所なるが日本自動車倶楽部にては今回委員会に於て同所に新たに自動車用の渡船を新造するの議を決し秘書高田琢雄氏を栗橋に特派して実地を踏査せしめたるに町長橋本栄氏其他の有志種々の便宜を与へたれば十分に踏査を了し愈々渡船の新造に著手し出来の上は自動車倶楽部の会員章を持てるものは無賃にて渡し倶楽部外の自動車も極めて低賃にて渡す筈にて船の保管及監督には橋本町長之に当る事となれりと

大正元年8月8日（名古屋）

●有栖川宮御近況

〈有栖川威仁親王殿下には先帝崩御の悲報に接し給ひて御悲嘆如何ばかりかは今更申上ぐるも恐れ多き次第なるが其際直ちに御帰京遊ばされたとき旨近侍に御沙汰ありしも殿下御病中に在

す事として只管御止めを御諫言し申上げたりされば殿下には病中の程も御忘れ給ひてせめて御埋棺式の御陵迄御奉送申上げたき旨今上陛下並に皇太后陛下に御伺ひ中なりしが両陛下には殿下が御病中殊に酷暑の際なれば宜しからずとて御許されざりしが殿下には聖慮の程を感泣し給ひ御病中は宮城に向ひ先帝を御遙拜遊ばされ渡辺宮相に対し特に殿下御乗用の自動車を何かの用に使用すべき旨御沙汰あり岡田家令の御沙汰を伝へたれば宮相は殿下の有難き御詔を畏み御不例以来公務に使用しつつあり、有栖川大宮妃董子殿下には御老体の上に御隠居の御身の上なれば従来公開の席には御外出あらせざりしが威仁同妃両殿下御病中にあらせらるれば先帝陛下崩御以来日々御参内先帝御神霊を御拝あり 両陛下及び皇太后陛下の御機嫌を奉伺遊ばされつつあり

大正2年2月14日(時事)

●自動車倶楽部総会、会員自動車に就て意見の交換をなす

〈日本自動車倶楽部第五回総会は十三日帝国ホテルに於て開催したり出席者は日本人側にては山本条太郎、森村開作、藤原俊雄、星一等の諸氏又外人側にてはフレーザー、スコット、スーザー、ホーラー等の諸氏数十名に及び警視庁よりも長谷川二部長、原田技師等出席委員長フレーザー氏委員の報告を為し次に山本氏役員選挙の報告を行ひ夫れより会員交るがわる自動車に就いての意見を述べ藤原氏は自動車課税問題及び乗合自動車に就いて警視庁当局者に望む所ありて晚餐に移り席上長谷川二部長は警視庁より見たる自動車談を松村氏は新聞記者の見たる自動車談を為したる後フレーザー氏の発声にて会員の万歳を山本氏の発声にて各国帝王及大統領の万歳を三唱して散会したり当夜改選したる倶楽部役員左の如し

(委員長)フレーザー(副委員長)大倉喜七郎(名誉会計)山本条太郎(委員)小川綱吉、藤倉五一、森村開作、林慈作、スコット、スーザー、ホーラー、メヲトカーフ、セフフワー、マンワーリン、シーレー、ダビス(監査役村井吉兵衛)秘書高田琢雄、ニクル

大正2年4月10日(時事)

●改正自動車税率、今ま迄は一台六十円、四月以来馬力に依る

〈東京府に於ては従来自動車の税率に就て何等の標準を設けず只単に年額一台に就き六十円の割合にて徴収し来りたるが近時自動車の数漸次増加して四百台を以て数へ随って其型も種々雑多に岐れて五人七人乗の大なるものあれば一人乗の如く小なるものもあり従来の如き一定の税額に依る時は不公平なるを以て四月一日より愈改正を實行し五馬力未満のものは年額二十円、五馬力以上十馬力未満のものは四十円、十馬力以上十五馬力未満のものは六十円、十五馬力以上二十馬力未満のものは八十円、二十馬力以上は百円となしたり当局者曰く固より此の標準と雖も公平と均衡を保つ点に於て決して完全のものに非ざるべきも只正確なる課税率に向って一步を進めたりと云ふべく更に再び改正の時期あるべしと、成る程馬力の数の多きものが必ずしも大なる車体を有するものとも限らず又迅速なる疾走力を有するものにあざれば実際正確なる課税を為さんとするには諸多方面より研究するの要あるべし自動車の本家本元たる泰西諸国も只僅かに一二ヶ国が何人乗によって課税率を取るの外大多数は馬力によって其標準を定め

居るの状態なりと云ふ)

大正2年4月16日(時事)

●自動車の税率は馬力が標準、それに就て警視庁と府当局の意見の相違

〈東京府に於ける自動車税が従来一台六十円なりしを本年度即ち四月一日より馬力数に依りて課税することに改められしことは既報の如し此馬力課税法は西洋諸国にも例のある事にて大隅伯を会長とせる日本自動車倶楽部にも嘗て会長の名を以て此課税に依るべきことを建議せしことある程なれば先づは多数自動車所有者の希望に添ひし改正と云ふを得べきも扱て此改正に依る馬力の算定法を如何にして定むるべきかと云ふに府庁には馬力試験に関する何等の設備もなく唯だ警視庁の調査に依頼し其通知を待って課税するに過ぎ殊に警視庁当局者との間に意見の衝突あるものの如くなれば爰に両者の説を挙て自動車所有者の参考に資すべし

▲警視庁の意見 東京府が馬力に依って課税せんとするは良けれど其標準を当庁の調査に依ってせんとするは如何があらん当庁が自動車を調査するの必要は取締上より出でたるものにて元來課税とは何等の關係なければ必ずしも実馬力を知るの要なく従って何等実馬力を測定するの設備を為し居らず馬力を課税の標準とする以上は正確に実馬力を調査せざれば課税に不公平を生ずるの虞なきにあらざり実馬力を正確に調査せんには一台の調査に少くも一日位を要すべく警視庁は左迄多くの労力を費して之を試験するの必要なければ未だ正確に実馬力を調査せしことなく唯だ届出でに依りて登録し置けるに過ぎず従來の如く一台幾許と云ふ課税法なれば届出づる者も或は正直に馬力の申出でも知れざれども今後の課税が馬力に依るものとすれば届出での馬力には決して虚偽のものなしと云ふべからず又従前届出での分にては米國製のものは其製造会社が特に馬力を實際よりも多く表示し居るもの多く営業者間にては米國製のものには課税率にコマの八を掛けて課税せよとかコマの五を掛けよとかの申出でもありと云へり是等は強ち米國製のみには限らず会社社に依りて商売物に花を飾るの意味を以て実馬力より掛値を為して売物もなしと限らず東京府が馬力に依って課税するにも拘らず専門の技師さへ置かず警視庁が左迄必要として調査し居らざる馬力の登簿を標準とせんとするは其當を得ざるものなるべしと思ふ

▲府当局者の説 馬力に依って課税する事は府会の決議に依って本年度より改正実施することとなりたる次第なれば差当り警視庁の認めたる馬力の通知を得て之を標準として課税することと為し居れるなり尤も自動車の馬力は其製造国と会社とに依って多少の相違あり殊に米國製の物は英國製杯より大に差違あれば米國製の物にはコマの七を掛けよとか八を掛けよとか申出づる者あれども米國製にては会社に依りて又多少の差違あれば其申出でに應ずる訳けにも行かず將來の馬力算定に就ては目下研究中なれども差当り警視庁の認めたる馬力数を根據とするの外なく警視庁にては其馬力を認めて登簿したる以上は既に公認したるものと見るを得べければ強ち無稽のものなりとは云ふを得ざるべし云々)

大正2年6月13日(時事)

●自動車課税問題と倶楽部と、届出の馬力は不正確、爾後は倶楽部で測定

〈自動車の課税は四月一日より其車の馬力に依りて課税する事に改め現に実施し居る事及び右に関する府県当局の意見と警視庁側の所説とは既報の通りなるが

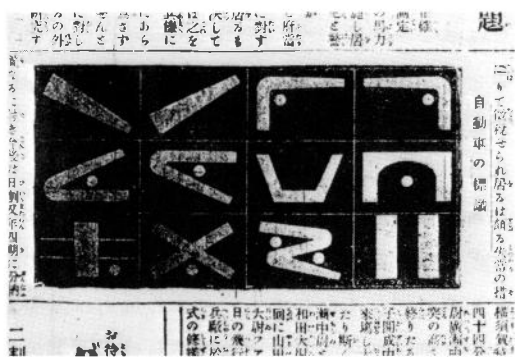
▲其後の模様 右改正に就て府当局者は便宜上警視庁の自動車許可に対する登簿馬力数を根據として課税し居るも警視庁側にては届出での馬力数は決して正確なる物とは言ひ難く其は同庁は之を正確に知るの必要なきより届出で其儘にして別に測定試験を行ひたるものにあらず然るに府が自ら測定の設備をも為さず単に警視庁の帳簿に依りて課税せんとするは公平とは云ひ難しと云ひ之に対し府側にては差当り警視庁届出に依るの外なけれど本年度中には他に良法を研究すべしと云ひ居れりと

▲倶楽部の運動 右に就き自動車倶楽部は団体として会員は勿論自動車所有者を保護するの必要上より両庁の手数を省き且つ課税の公平を保たしめんとて過般会員協議の結果右に関する特別委員として大倉喜七郎、山本条太郎森村開作藤原俊雄林愛作の五氏を選び此問題の研究を一任せしより特別委員は右課税の標準たる馬力数は倶楽部に於て測定して証明書を与へ当局者は夫れに依りて課税することとせば双方の便利にして課税も公平なるを得べしとの事に決し此程大倉林二氏は府庁に杉原府会議長を訪ひて此案を提出して種々打合す所あり杉原氏も之を賛し是非改善に努力すべきとを明言したりと

▲別に改正の要求 尚ほ其際右の委員は同議長に対し別に一つの改正案をも提供したるが右は従来の課税法が年二期なるより例令ば四月二日廃車となりたる物も九月末日迄の租税を課せられ又九月末日に買入れたる者は四月一日に遡りて徴税せられ居るは頗る失当の措置なるに付き今後は日割又年四期に分納することに改められたしとの問題をも提出せしに同議長も之を諒とし前記測定問題と共に申請書を差出すべく同倶楽部は其手続きを為したりと

▲道路標識の建設 右の外同倶楽部にては自動車所有者の便利と一般人への注意の爲め種々の計画を為し居れるが既に実行し居れる事業としては雑誌発行の外に自動車専用地図を発行するの計画あり既に東京附近、名古屋附近、宇都宮附近、金沢附近の四図を発行せし由なるが別に自動車旅行者及び道途の住民の危険防止の必要上より道路の危険を予知せしむる為の各種の符号ある道路標識票を建設することとなり既に横浜より本牧に到る道路及び同地より鎌倉及び藤沢に到る迄の間に右の標識を建設したるが次第に各地に及ぼす筈なりと右は此に図示せし通りの物にして其附号は左記を標示せしものなりと

(写真-11) 「自動車の標識」
大正2年6月13日付時事新報から
注：説明は同日記事本文参照、日本で最初の自動車用道路標識である



〈向って左より上段）一急降道路，二急坂，三右急曲，四左急曲（同中段）一急曲及坂路，二急曲及急降道路，三凹凸道路，四隧道，（同下段）一鉄道踏切，二危険交叉道路，三急蛇線状坂路，四通車不可能道路，但し白丸を附しあるは音響器を吹鳴すべき必要あるを示したるものなり〉

大正2年7月7日（時事）

●有栖川宮殿下薨去，四日来御容体御急変，六日午前十時薨去さる

〈予て舞子にて宿痾御静養中なりし有栖川宮威仁親王殿下には四日夜御容体に御急変あらせられ五日午後には御危険を報ぜられしが六日午前十時遂に薨去あらせられたり四日午後六時以後の御容体御経過並に其他之に関する事項左の如し

——以下略——

大正2年7月7日（時事）

●御平常自動車に特別の趣味

〈宮内省調度寮自動車係有馬純篤氏は昨年迄有栖川宮家の家従として近侍することを十年殊に殿下の御愛乗ありし自動車の助手を勤めて日夕御側近く仕へ且つ一昨年殿下の御思召に依りて自動車研究の爲め外遊せし等特に殊寵を蒙りし人にして殿下の御平常を知悉すること詳なり

▲自動車の御先鞭 殿下は去る卅八年独逸国に御名代として御渡航の御帰途ダラック号自動車を御購入在らせられ同会社より技師一人附添ひて之を齎した到着後殿下には右の技師をして其運転を御練習あり自分（有馬氏）には同技師より自動車の機械の事を練習せしめられ殿下と共に日々自動車の操縦に従事すること三ヶ月なりしが殿下には極めて御器用に在らせらるるより惣ち運転上に御熟達に在らせられしのみならず語学の御修養深きと数理に御精通あらせらるる等より自動車に就いては非常に御精しく成らせられたり当時日本には自動車唯二台より渡来し居らず一台は東京に一台は横浜に何れも外人が乗用し居りしのみなれば日本人として自動車を御乗在りしは殿下を嚆矢とすべくのみならず御奨励の爲め費用を惜ませられず右のダラック号を標本として吉田真太郎に命じて自動車全部を作製せしめられたり此点に於ても殿下が先鞭を付けられしなり〉

大正2年7月7日（時事）

●葉山と故殿下

〈葉山一色にある有栖川宮殿下御別邸松雲閣は去る二十四年の御造営にかかり爾来宮殿下には年々御来遊あらせられたるが明治四十二年の夏英国より御持参の自動車を御自から操縦あらせられて御来遊二泊ありたるが最後にて其後御乗用相成りたる自動車は当時の別当たりし山尾氏に殿下賜相成りたるやに承はる殿下が常に文明の利器を利用あらせられることは驚く程にて自転車の欧州各国に流行する頃は日本に於ては最も早く殿下が御用ひあり自動車行はるれば直に之を御採用相成り御自から把手を採らせて運転遊せさるる等頗る御器用に亘らせられたり亦同邸御滞在中は西洋料理は好ませられず日本料理の鮎菰豆唐瓜等を御好みあり酒は葡萄酒を少量御召上られ煙草は土耳其製を御好みありたりしと留守番の者は語り（葉山六日電話）

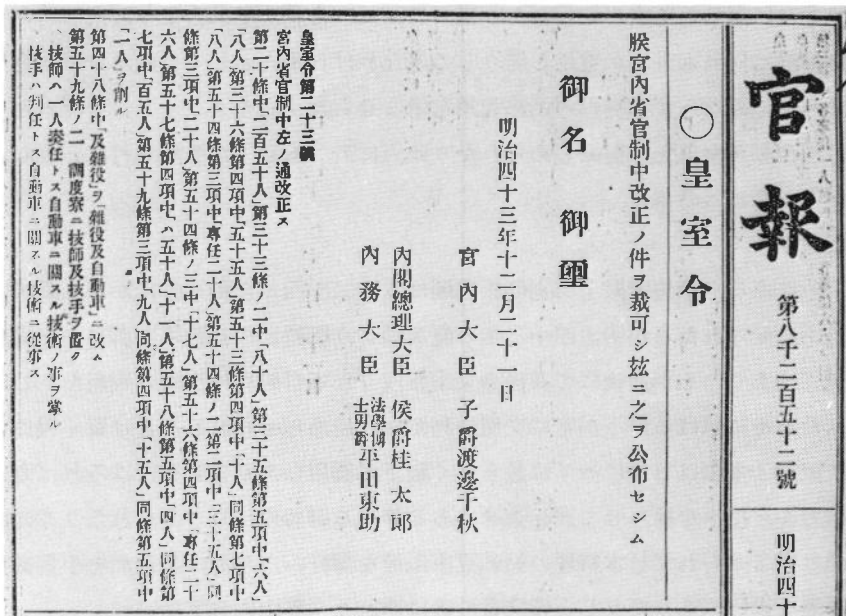
4 資料記事集その2 (皇室自動車関係)

明治43年12月24日 (伊勢)

●御料自動車

〈昨日皇室令第二十三号を以て宮内省官制に改正を加え調度寮に新に技師及び技手を置き(技師は奏任一人)自動車に関する技術の事を掌らしめ技手(定員九人判任)は自動車に関する技術に従事せしむることに定められるが右は近来皇族貴賓の御来遊に際し従来御馬車を以て御観覧の用に供し来たりたるも世の進歩と共に交通機関の発達を来したる今日御馬車のみにては不便少なからざるより斯く定めさせらるるに至りたるものにて現に今春我が陸海軍御視察として清国載涛殿下の御来遊ありたる際宮内及び陸軍当局は殿下の御滞在中成るべく多くの御見学を遂げさせられるべき事を期し公式の外は総て自動車を御乗用に供し大隈其他より十数両を徴発し御接伴申上げ今秋我が海軍御視察として清国貝勒載洵殿下の御来遊に際しても亦同じく自動車に御乗用に供したるに両殿下共短期の御滞在中充分の御視察を遂げさせられ最と御満足あらせられたる等の例あり自動車に成績極めて良好なるより宮内省に於ても御来遊の貴賓御接伴用として自動車を備ふる必要あるを認めたるのみならず明年春陽の候には独逸皇太子殿下御来遊の事もあるを以て今回自動車数両を購入し調度寮の管理に属せしむる事となりたるを以て之れに関する技術官数名を置きたる次第なりと〉

(写真-12) 「官報」
 明治43年12月21日付「皇室令第23号」
 注：自動車の文字に注目



明治44年1月10日（名古屋）

●帝室と自動車，十二台御買上げ内議

く九重の雲上と訂盟列国との御交際は年と共に御親厚を加へさせ給ふは国民の齊しく慶賀する所なるが宮内省にても常に国賓の御待遇に就ては不行届の点なきやう準備を為し居るが昨今世界各国とも自動車の流行旺盛を極め高貴の方々は朝夕の乗用とも馬車を棄てて自動車を執る有様となりしが宮内省にて自動車としては未だ一台もなく昨年秋清国の皇族載涛殿下御来朝の砌の如きは一時の急を凌ぐため止むを得ず都下知名の人々が乗用の車台を俄かに借上げしが斯くの如き事は一等貴賓に対しても礼を失ふものなりとは当時当局者の嘆息したる所なるが旧臘来俄かに自動車買上げの議起り三井物産会社を始め高田商会、大倉組等に夫々見積り書の提出を促せる由に聞けるが今宮内省が買上げの上使用せらるる自動車は十二台にして主に外来の貴賓用のラントレット型の五人程を乗すべき最も美々しく時価一万五千円内外なるが三井物産が万一御買上げの光栄を得ば英、独、佛の勝れたる自動車独逸のデーミュラモートレンゲゼルシャフ会社のマーシリー型と云ひ我邦にては有栖川宮殿下と伊東巳代治子の既に乗用せられ器械堅牢に乗心地も亦よく同会社は先自自動車を造り出だし世界に名声を博し居るものなれば多分十二台は之れに決定すべく追って運転手は主馬寮内に編制せらるべしと

明治45年2月23日（民友）

●両陛下御召料の新式自動車，英国皇帝のと同型

く宮中の御料として自動車を御用ひさせ給ふ趣は既記の如くにて先頃調度課より英国倫敦のデムラー独逸スタッガートのマーセデス及び伊太利トリノのフィヤット三社に注文せられたれば三社の代理店なる日本自動車合資会社社長大倉喜七氏は旧臘二十一日を以て製造地視察の途に上れるが

御料自動車は総て九台にてデムラーは両陛下の御召料として御治定あらせらるべくマーセデス及びフィヤットは臣下用並に調度用として御採用相成る可くやに承はる以上三種共孰れも世界第一流の車両にして欧羅巴に於ける各皇室の御料車として充用せらる独逸皇帝の如きは殊に自動車に多大の趣味を有せらるれば昨年既に皇帝用として九台を算へ一般宮中の調度としてはマーセデス並にフィヤットは勿論世界最良の自動車は大抵備へさせ給ふ由なり今回畏くも我陛下御召料として御内定あらせられたるデムラーは英国ジョージ陛下の御乗車と同型にして五十馬力を有し一時間の速力約五十哩構造はランドレー形にて四輪の護謨輪あり千五百燭のヘッドライトもて前方を照すべく機関は有名なる最新式なるナイトエンジンとて全く無声、無音、御窓掛其他御裝飾は未だ詳にするを得ざるも御料馬車の如く多分菊花御紋章を蒔絵にせらるべく今秋到着の筈なりと

明治45年6月18日（報知）

●皇室自動車庫

く宮内省にては外賓の接待用其他の為め自動車使用のことに決し其事務は調度寮にて取扱ふこととなり同寮に奏任技師判任技手を置くことに決したれば車両を格納すべき車庫新築の必要を感

じ予算編成の上畏き辺りの御裁可を仰ぎ地を宮城蓮池脇（元皇宮警察署前広馬場）に相し去る四月上旬より工事に着手したるが該工事は総坪二百五十坪にして全部鉄材を用ひ欧米最新式の建築法に依りて凡そ十四五台の自動車を入るに足る由此経費約五万円にして今年十一月頃外国に注文せる自動車の到着前に竣工せしむる予定にて目下頻りに工事を急ぎつつあり

大正元年9月24日（時事）

●宮内省自動車庫の全潰、大内山に物凄じき音響、幸にして自動車皆無事

〈昨朝の烈風には宮城内にも被害少からざりき、午前八時半頃宮城内旧蓮池門に対せる位置にある間口四間奥行七間余瓦葺木造の御料自動車倉庫一棟が堅固の御構造なるが古き建物なりし為めか卒然烈風に吹き倒されて柱折れ瓦飛散し見る物凄じき有様を呈したるが其の倒壊の際の響きは強裂の風に和して恰も石垣の頂上にある三重の檜が崩壊せしかとも思はれしと云ふ左れど幸にも自動車は前日来一台も此の中に在らざりし為め皆無事なりき〉

大正元年10月19日（時事）

●歐洲自動車界の近況

〈自動車其他の用務を齎して昨年来渡欧の途に上り歐洲各地を巡遊すること約九ヶ月に及びて此頃帰朝したる大倉喜七郎氏が歐洲自動車界の近況に就いて語る所を記せば、・・（中略）・・、自分が昨年渡欧する時同伴して行った宮内省の自動車技手佐藤丈夫は其後倫敦の自動車倶楽部に入って自動車に関する研究をして居るが之も近々に帰朝すると云って居た、・・（後略）・・〉

大正元年10月31日（時事）

●皇室自動車庫の工事、十一月下旬に竣成の筈、本邦唯一の模範格納庫

〈皇室自動車格納庫は宮城内蓮池前（元皇宮警察署前）に選定し本年三月上旬より起工されたることは既報の如くなるが右は総坪数二百五十坪（内訳百坪は自動車十五台置場、百坪は洗掃場、残五十坪は修繕室、鍛工場並に暖房室にして該建築は最新欧米の建築術に則り材料は全部日本製のものを用ひ構造は鉄筋コンクリート外壁は耐久化粧煉瓦を以てし洗掃場及び鍛工場には特に防水防火の設備を施し之等の基礎工事は五月を以て終了し順次工事進捗し十一月二十日迄に竣成する計画なりしも七月二十日明治天皇違例の発表と共に鉄筋組立中の音響甚しきが為め組立を中止し内部の影響なき部分のみ工事を進め居りしに先帝崩御及び御大葬等にて工事十数日遅滞したるより当局は従業員職工等を増し日夜工事を急ぎ是非共十二月中旬に完備せしめんと意気込み居れり而して工費総額は五万余円にして他に元皇宮警察署の皇室自動車事務所に宛つる為め之が修繕并に中間道路拡張費等四千余円を要し目下八分通りにして又欧米より輸入さるる皇室貴賓用自動車十三台は十一月中旬到着の予定にて車台置場にはスチームを通じ器械並に油類の凝結せざる様冬期間の保存にも注意しあり該建築竣成の上は本邦唯一の模範自動車格納庫となるべし〉

大正2年1月12日（時事）

●御料自動車到着、英皇帝陛下御乗用と同型五十馬力、五十哩の速力

〈宮内省調査寮にては宮中の御料として曩に自動車の買上げ方を在英日本大使館へ依頼したる

が右は都合九台にて一台は旧臘三十一日横浜入港の日本郵船会社汽船三嶋丸にて到着し去る十日宮城内蓮池門内の新築車庫へ輸送され次で本月十五日横浜入港の加賀丸にて二台、二十一日入港の熱田丸にて六台到着の予定にて是等の車台は英国倫敦のデムラー、独逸スタットガートのマーセデス、及び伊太利トリノのフィヤットの三社へ注文せしものにデムラーは両陛下の御召料、マーセデスとフィヤットは臣下用並に調度用として御採用相成るべしと而して三種とも世界一流の車両にて御召料のデムラーは英皇帝ジョージ陛下の御乗用と同型にて五十馬力、一時間約五十哩の速力を有し構造はランドレー型千五百燭光のヘッドライトを備へ機関は最新式ナイトエンジン無声にして御料馬車の如く多分菊花御紋章を蒔絵にて付けらるゝならんと

大正2年4月10日(時事)

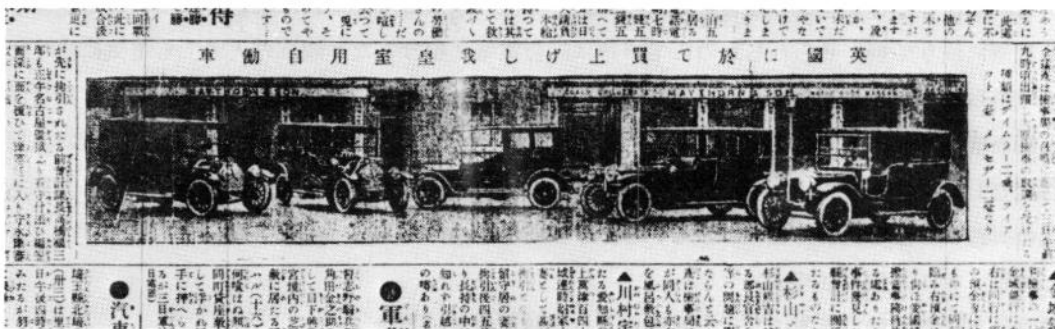
●自動車の御試乗、近県の行幸は自動車、主馬寮は漸次に縮少

く聖上陛下には曩に英国より到着したる御料自動車に御試乗の思召あり九日宮城出御の御序を以て御車寄より吹上御苑の間に於て御試乗の筈なりしも生憎雨天にて同日は御見合せとなりしが近日更に好晴の日をトし新宿御苑にて御試乗相成るやに拝承したり右に就き多年海外に赴きて実習したる調度寮佐藤技師は加藤助手と共に此の光栄ある運転を奉仕するよしなり

(写真-13) 「英国に於て買上げし我皇室用自動車」

大正2年2月4日付時事新報から

注：「MAYTHORN & SON」の工場名と、COACH, MOTOR の看板文字が判読できる。



▲御馬車と自動車 元来宮内省にて自動車を購入したる目的は外資接伴の爲めにて陛下御料車の外に八台あり何れも桔梗門内の格納庫に納めたるが今後は必要上従来の御馬車に代へ自動車御使用の時期に進むべく従つて現時の主馬寮は漸次縮少せられ代ゆるに自動車の設備拡張行はるるに至るべしと

▲浅からぬ御経験 今上陛下には自動車に浅からざる御経験あり去る明治卅三年の春我国にては未だ自動車の実物は勿論其名も知る者少かりし時陛下御大婚當時在米同胞より東宮御所へ自動車を献上したる事あり之ぞ我国に於ける最初の自動車とも申すべく右は電気発動機のものなりしかば早速電気技師に命じて運転せしめ給ひし事あり又其後屢々有栖川宮殿下の自動車に召され現に東北行啓の折には猪苗代湖畔にて宮殿下が把手を執らせ給ひ之れに召されたる事もありたり

近県への自動車 尚ほ承はる所によれば神奈川、埼玉等の近県へ行幸の際従来は其都度御召列

車を運転し普通列車の発着時間を俄かに変改し又は全然運転を取消す等の事ありて一般旅客に少からぬ不便ある事は夙に天聞にも達し居り又宮廷の当事者も十分諒察し居る所なれば今後は右の如き近県にて即日御遷幸啓の場合には自動車を御使用相成るに至るべしと)

大正2年4月11日(新愛知)

●名譽の運転手、海外にて研究を積める者

〈天皇陛下には既記し奉れる如く近日宮城に出御の際天氣の好き折を見計らひ御料自動車に御試乗、宮城御車寄より吹上御苑内を御巡周相成る由なるが右御召自動車の運転手を拜命せらるべき佐藤武夫氏(二十三)は神戸市の生れにして京都府吉田中学校に学び半途にして上京し工手学校機械科に入学して同校を卒業し去四十二年末大倉組自動車部に入り更に四十五年宮内省調度寮技師となり宮内省の命にて自動車の為め直ちに英国に渡航し英京倫敦^{ロンドン}ローヤル自動車倶楽部附屬学校に入りて機械製作其他運転操縦の方法等につき研究を重ねること六ヶ月にして同校を卒業し其後独佛伊等の諸国を巡歴して輪界の視察研究を遂げたるが今回長き辺りにて購入ありし御料の自動車は倫敦を距る約百哩余の田舎なるコベントリー市のデムラー会社の製作にかかり三台製作せし姉妹車の一にして他の一台は英国皇帝陛下の御料に召され他の一台は目下同社の手許に在るが同社にては一切外人の出入を厳禁しあるも佐藤氏は大使官其他の照会に依り特別の待遇を受けて同社に入り約四ヶ月間熱心に研鑽を重ねたる後御料自動車と共に昨年中旬帰朝し爾來宮内省に出仕して日々運転の練習を為しつつあり尚洩れ承はる所によれば御召自動車は最も進歩したる型に依りて製作せられしものにて車燈は悉皆電気仕掛けとなり煙草の火までも電気に依りて点け得らるるやうの仕掛けとなり運転手台の腰掛の如きも自由に廻転するやうの構造にて都合四人乗り機械はナイトエンジンとて民間のその如く毫も音響などを発せず振動亦少なく極めて居心地宜しく車台は倫敦フーバー会社の製作に係り窓掛電球等も皆長き邊りの命に依りて十六菊花の御紋章を鏤めたる特製車にしていと麗を極めたるものなりと(東京電話)〉

大正2年4月12日(時事)

●宮廷自動車到着、英国より十一台来る、技手練習生等に訓示

〈昨年来英国其他に御注文相成りし宮廷自動車は去月末に至り車台全部到着し爾來宮内省自動車課技手数名の手に依り試運転を為し一兩日前を以て所屬長官たる長崎調度頭の検分を終へたり今其車台の種類を聞くに

皇族用一台、貴賓用一台、臣下用四台、合乗一台、貨物用二台、練習用二台
都合十一台にて右は今後何時にても運転に差支なきやう設備されしを以て長崎調度頭は齊藤主事と共に十一日午後二時より蓮池門内なる自動車格納庫協の事務所に赴き技手及び練習生等十余名を召集し

一、皇族用車及貴賓車の運転に関して周到なる用意を怠らざる事は申迄もなく一般自動車の運転に関しても総ての点に綿密なる注意を怠らざる事

二、往来頻繁なる道路に於ては別して通行人に危険を感ぜしむる虞尠からざるを以て予め之が

防止に注意を怠らざる事

三、砂塵の起き易き道路に在っては速かに注意し通行人に迷惑を感ぜしめざるやふ注意すべき事

四、搭乗者に対しては勿論其他に対しても礼節を重んじ深く言動に注意を怠らざる事
其他数項目ありたるが長崎調度頭は近日聖上陛下の宮城出御の折都合を伺ひ奉り御車寄せより二重橋を経て三角門に出で振天府脇より吹上御苑附近に達する約七丁ばかりの間に乗御を奏請するに至るやも測り難しと云ふ

大正2年4月13日（時事）

●宮廷自動車課長、伊東子令嗣太郎に任命

〈宮内省の自動車は調度寮に於て保管及び運転其他一切の事項を管掌することとなり海外より到着したる同車を格納庫に収納し技手及び工技に関する職員の任命もありたるが今度更に米田侍従職幹事及び長崎調度頭の推薦に依り子爵伊東巳代治氏の嗣子海軍中主計法学士にして宮内省主猟官たる正五位伊東太郎氏を任命する事に決し長き辺りの御裁可を経て今十二日左の如く発表ありたり

主猟官 伊 東 太 郎

調度寮事務兼勤を命ず

右に付き伊東氏は調度寮自動車課長の事務を執ることとなり明十四日長崎調度頭と共に自動車格納庫へ赴きて事務を執るよし

大正2年4月15日（時事）

●宮廷自動車検分、長崎調度頭より一同に訓示

〈長崎調度頭、齊藤主事、伊東調度寮御用掛は昨日午前九時半頃より旧蓮池門脇なる宮廷自動車格納庫に至り主任技術者の案内にて各自動車の検分を為し夫れりより事務室及び附属舎検分を終りたる後長崎調度頭より一同に対して諸般訓示を為したるが今日以後自動車に関することは伊東新任課長担当することとなりたりと云ふ

大正2年4月15日（時事）

●自動車御車に風薫る、陛下親しく御試乗、御苑内を御運動

〈春は稍や末方の和日照々として風柔かに御庭の桜静心なく散り布く十四日午後二時天皇陛下には愈青山離宮御車寄より御料の自動車に召し鷹司侍従長御陪乗佐藤技手の運転にて薫風樹々に香る御苑内を御運動主馬寮分既脇馬場に成らせられ同所にて長崎調度頭、中村侍従武官長、伊東子令息、其他侍従等数名に御陪乗を差許され約一時間御苑内乗御の上御気色麗はしく御車寄に還御あらせられたり

大正2年4月15日（時事）

●自動車御乗用の御経験、今日迄三回乗御、最新式の御装置

〈今上陛下には十四日青山離宮内にて昨年英国より御買上げ相成りたる御料の自動車に御試乗

在らせられたる趣は別項所記の如くなるが陛下が青山離宮内にて自動車に乗御在らせられしは今回が始めてにはあらず未だ東宮に在しましし頃離宮其他にて三回まで乗御ありしこととて陛下には

▲**自動車の御経験** に富ませらるのみか当時御輔導の職に在らせられし有栖川宮殿下は最も自動車に就いて御精通あらせらるる事とて何呉れと無く御説明上げしやに承る抑も陛下が初めて自動車に召させられしは去る四十年頃の事にて一日宮殿下が殿下御乗用のダラック号自動車にて青山離宮に御出向の際当時東宮に在ませし陛下には宮殿下の御運転にて之に乗御同離宮内を御試乗在らせられたり第二回は四十一年の十月東宮として

▲**東北行啓の折** 福島県猪苗代湖畔翁島なる有栖川宮殿下御別邸に御立寄あらせられ此時にも陛下には一條侍従長の御陪乗宮殿下の御運転にて殿下御乗用のマルセデイス号に乗御在らせられ供奉員等亦他二台の自動車に分乗御供申し上げ翁嶋より湖畔に添ひて一里余の猪苗代町なる亀ヶ城に成らせられ往復とも御機嫌いとも麗はしく湖面の風光を飽かず御賞美在らせられて宮邸に還御在らせられたり陛下が過去に置かせられて普通の道路殊に里余の長程に乗御在られたるは之を始めとし奉ると承る第三回目は青山離宮内にて此時も宮殿下の自動車に乗御陛下は助手台に御腰を掛けさせられ

▲**御乗用の駿馬** を彼方此方に率かしめ給ひて御乗馬の自動車に驚かざる様御馴し相成りたり今回御試乗遊されし御料の自動車は無声機関を以て世界に名高き英国デムラー号なる上御料車として善美を極めたる車内の装飾は世界各国帝王の御料車にも類少しとの事にて外部は濃き海老茶色に塗り内部は銀鼠色の金模様ある布にて張り詰あり燈火、暖房、通風等は総て電気仕掛の奇巧を凝らせる外御化粧道具の設備さへあり何より何まで最も進歩せる新式の御装置を施したる物なれば定めて陛下に置かせられても今昔の御感を催させ給ひしことなるべしと拝察し奉る)

大正2年4月16日(時事)

●**東宮自動車にて御通学、時間御節約の爲め**

〈過日青山離宮構内の仮御殿より高輪の新東宮御殿に御移住あらせられたる東宮殿下には今度学習院へ日々の御通学に御馬車にては途中に約一時間に近き時間を要し御不便の点多きにつき爾今自動車を御使用の事に御内定ありたりと申す〉

大正2年4月28日(時事)

●**聖上自動車乗御、フロックに山高帽の御軽装、三親王と共に御園内御運動**

〈聖上陛下には廿七日午後一時三十分自動車に召し青山離宮御構内を御運動あらせらるる旨の御沙汰あり宮城蓮池門内自動車格納庫より御料の自動車及び供奉用自動車を離宮御車寄迄御呼寄せありてフロックコートに黒の山高帽を召させられ恰も御参内中の東宮裕仁親王、淳宮雍仁親王、光宮宣仁親王各殿下を伴はせられ御料車に御同乗田内侍従に御陪乗御付られ供奉車には海江田侍従、嶋内武官相磯侍医同乗し伊東御用係、有馬技手の運転にて御車寄を東に御正門前より臣下用車寄前を出て御通門内、皇宮警察分署前を右に、衛生試験場大膳職脇を経て御裏庭に入らせら

れ山樹々の新緑翠滴れんとする光景を御賞覽遊ばされつつ主馬寮分厩脇の馬場に着御此処にて御下車、御愛馬藤園、近知、朝千鳥及東宮御愛馬朝鮮産会寧タツプ等御巡覽遊ばされしが折柄西南の風強かりしを以て御騎乗の事なく再び自動車に召し二時過皇子仮御殿脇を経て御気色麗はしく御車寄に還御あらせられたるや承わる当日東宮及二皇子各殿下には自動車に乗御遊ばされしを殊の外御満悦あらせられ皇后陛下に御対顔の上種々の御物語りも之有りしやに拝聞せり

大正2年6月30日（時事）

●世界に三百万両の自動車がある、高等官の運転手が二人、車体は安いが油は反対

〈自動車の運転手と云ふ職業は僅か五六年以来の新職業で殊に此処一兩年の間に甚だしく増加したのであるが今日では官界にも運転手なる一階級が出来て来た

▲奏任の運転手 即ち官内省の運転手が夫れであって調度寮技手の名儀で判任官の待遇を受け然も判任としては比較的高給の四五十円の俸給を受けて居る者が四五人あるが夫れ以上に珍奇なのは自動車に対する技能を有するが為に高等官の職に就いて居る人が二人あって然も其二人は警視庁から運転手の免状を貰って居るそれは枢密顧問官子爵伊藤巳代治氏の嗣子太郎氏と其弟の二郎氏との二人であって太郎氏は海軍中主計の予備で本職は宮内省の主猟官であるが本年四月更に調度寮の奏任御用掛兼勤を命ぜられ自動車課長の事務を執ることとなったし二郎氏は一昨年鉄道院が自動車を貨物運搬に使用し且つ運転手をも養成することとなったので其際同院の技師に任せられ工作課兼倉庫課に勤務することとなったのである今日では自動車専門では無い様だが其始めは自動車に対する知識を有する所から高等官となったのである二郎氏は最も古い運転手で免状の番号は五十二号、兄の太郎氏は二百七十九号の免状である二郎氏は自動車に語って曰く

▲六年前から 自分が自動車を扱ひ始めたのは六年前で運転者として免状を受けたのは随分古い方だが先づ今日迄事故を起した事もなく鉄道院で養成した運転手も最う二年になるが幸ひに事故を起さない鉄道院には現に四人の運転手が居るが自分が最初一人を院内の者から人選して之に教へ込んで夫れに又他の者を教へさせたのである宅の方で運転して居る男も自分が教へたのであるが之も未だ事故を起した事はない運転手も此一二年車の増加と共に需要が多くなって碌々訓練も受けない者が運転手になるのであるから何うも事故が頻出して困るが之は何とか考へなければなるまい自動車其物は段々進歩して来て機械は頗る精巧になって来たが車の善悪は一二丁乗って見れば解る自分も元は道楽に乗廻したが道楽として使用するには各自の趣味に当嵌った車で無ければ興味が無い自分の気に入った車を扱って研究して見ると中々面白いものである

▲世界に三百万 自動車は追々廉くなって来るがガソリン油は段々高くなって来て英国辺りでは一函十五六円もするさうだ日本でも五六年前迄は和製の油なら二円五十銭位であったが今日では五円以上に騰貴して居るから経費が中々掛る米国辺りではガソリン油の代用品を發明したさうだが斯う油が高くなっては左様云ふ發明も必要であらう現在世界の自動車は三百万両と云ふ多数に達して居るさうであるから此車が一両平均一日二升宛の油を消耗するものとすれば世界中で一日の費消額は六万石に達する訳であるから油の騰貴を見るのも無理はないが之も研究しなければ

ならぬ事の一ツと思う〉

5 後 書 き

自動車の宮様と称せられた有栖川宮殿下も、明治38年から実4年の短い期間のご活動で、42年9月避暑先の翁島のご別邸から仙台までの田舎道を四十五里(175km)、自ら運転して往復されたあと病気に倒られたことは誠に残念であったが、日本の自動車導入期に大きな業績を残された上、自動車に殉じられた感がする。

大正2年7月、殿下の薨去にて有栖川宮家には御世継ぎなきため、大正天皇は第三皇子光宮宣仁親王(てるのみや のぶひと しんのう)に有栖川初代宮御称号の高松宮を宣下され、由緒ある宮家を今日に引継がれた。

吉田真太郎の製作した8台の自動車は「タクリー号」と称して各自動車史等に紹介されているが、これは当時の凹凸道を走る乗合馬車の姿を「がたくり馬車」と称していたことから、手造りの国産自動車を「がたくり自動車」と呼び変えた軽べつ的な俗称である。しかし、当時の新聞記事にもそのような呼び方は見受けられず、一部関係者から口述により伝えられたものと考えられ、「東京自動車製作所製」又は、警視庁に登録された「国産吉田式」と正式に呼び、我が国産第1号自動車の名誉をたたえるべきである。

明治37年5月、岡山市の山羽虎夫により製作された蒸気自動車の写真が残っており、国産第1号自動車との説もあるが、この車はタイヤ等の問題で実用にならなかったため、自動車としては残念ながら未完成車と考える。

日本自動車倶楽部は内外の自動車輸入業者が中心となり、自動車普及のため活発に活動して会員を増やしていったが、大正3年6月の第一次世界大戦の始まりで欧州からの自動車の輸入はと絶え、活動は次第に休止していった。



(写真-14) 「有栖川宮威仁親王所有の自動車」
「回顧写真大鑑第九集」(昭和27年7月、株式会社時事世界社発行)から転写。

今回の研究は有栖川宮を中心に自動車関係資料をまとめてみたが、明治41年夏の活発なご活動に比べ、翌42年夏メルセデスを輸入された後の資料が乏しく、信州へ遠乗り会を計画されたが道路事情からか実行されなかったことぐらいしか分っていない。また、年次や車種も分らない殿下と3輪自動車との写真があり(写真14参照)、今後とも本件の研究は必要である。

〔追録〕

(写真一五)「日本自動車倶楽部発行、月刊機関雑誌『自動車』創刊号表紙

注：同雑誌は大正元年12月創刊、大正4年12月号まで37冊発行されており、日英両文にて約50ページ。

我が国最古の自動車雑誌と思はれ、全国主要地区の道路地図や自動車旅行記など、貴重な資料が含まれている。

(国立国会図書館蔵)

